



Title	ホル・アスガト (Хѳл Асгаѳ)碑銘再考
Author(s)	大澤, 孝
Citation	内陸アジア言語の研究. 2010, 25, p. 1-73
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26140
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ホル・アスガト (Хөл Асгат) 碑銘再考

大澤 孝

1. はじめに

ホル・アスガト遺跡・碑文は、モンゴル国のボルガン県モゴド・ソムから南南東に約 32 km の地点にあり（本稿末の付図 A を参照）、マウンド中央で東西に並ぶ 2 つの石槨（ここでは突厥期の四角い板石からなる石囲いを指す）のうち東側のそれに属する方形板石の東面に 3 人の男性レリーフ像、板石上端や両端等に古代テュルク・ルーン文字銘文が刻まれていることでよく知られている〔図 1〕。本遺跡は北流するアスガト河から東方約 2.5 km の地点にあり、現地住民からは「ホル・アスガト (Хөл Асгат)」と呼ばれている。

これまで本遺跡・碑文は、W. W. ラドロフの『モンゴリア古代遺跡図譜』（以下、「アトラス」と略称）の出版以来、アスガト河から西方の地を指すモンゴル語「エヘ・アスガト」のロシア語訛した「イヘ・アスヘテ (Ихэ Асхэтэ)」の名で呼ばれることが多かったが、本稿では本遺跡がアスガト河から東方の地を指す「ホル・アスガト」に位置する事実を鑑みて「ホル・アスガト遺跡・碑文」の名を使用する (MNTSD, pp. 125-126, 237-238)。また本稿では、本碑文のテキストを扱う際には Asgat という簡略名を用いる。



図 1：1891 年当時の画像碑文
(アトラス 1892, Taf. XV, 2)

本遺跡は、1891年7月28日から8月7日の期間にホショー・ツアイダム遺跡の調査を実施していたロシアのラドロフ隊のもとに届いたモンゴル人からの遺跡情報に基づき、派遣された隊員の植物学者レヴィンにより発見された。その後、ラドロフからの指示を受けて、同調査隊員のヤドリントツェフが同年8月29～30日に現地調査を実施し、遺跡の写真および碑文の部分拓本を持ち帰った（Ядринцев 1901, pp. 47-49; Radloff 1895, p. 256）。その後、1893年夏に本アスガト遺跡を再調査したクレメンツが現地で横倒しになっていた2つ目の石碑を見つけて、銘文箇所を部分採拓したことが知られる（Кляшторный 2003, p. 21）。ヤドリントツェフは調査時に遺跡全体の写真とマウンド中央の東西に2つ並んだ方形石槨（本稿では以下、便宜的に東側の石槨を第一石槨、西側の石槨を第二石槨と呼ぶ）の全体〔図2〕および、画像碑文（第一石槨内にあり、3人の男性レリーフ像を中心にした碑文）の東側の部分を写真撮影した。その後、この写真からドゥディンが描き起したスケッチがラドロフの「アトラス 1892, Taf. XV」に収められている〔図1・2〕。また、ヤドリントツェフが採取した画像碑文の原拓本とドゥディンが作った修正拓本が「アトラス 1892, Taf. XXVI」に収められている。一方、1893年夏にクレメンツが採拓した画像碑文の銘文箇所の原拓本と修正拓本、及び彼が2つの方形石槨の東方で新たに発見した鹿の陰刻像と摩滅しかかった銘文の一部を持つ石槨外碑文〔第一石槨の外側にあつて、東側へと続くバルバル（balbal）石——故人が生

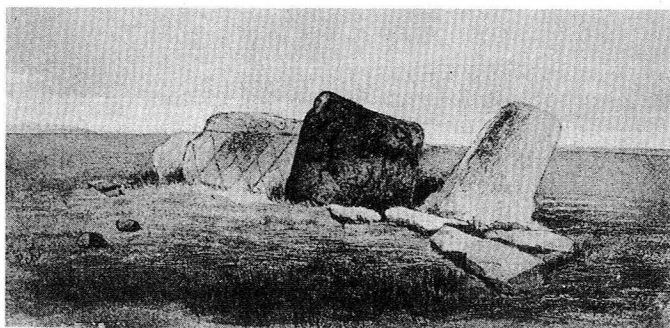


図2：1891年当時の本遺跡の景観
（アトラス 1892, Taf. XV, 1）

前の戦いで殺した敵と同数だけ墓前に立てられた未加工石——列との中間にあるもの]の原拓本とその修正拓は「アトラス 1896, Taf. LXXXIV, 1-7」に収められている。⁽¹⁾

因みに「アトラス」の主要な突厥碑文を再録出版したトルコ共和国の経済発展局 (TİKA) 発行の図版集 (Orhun 1995) のなかにも、本ホル・アスガト遺跡の「アトラス 1892」と「アトラス 1896」に掲載されたスケッチや部分拓本のすべてが採録されている。「アトラス 1892」掲載の図版 XV, Taf. 1, 2 は Orhun 1995, p. 59 に、「アトラス 1892」掲載の図版 XXVI, Taf. 3-5 は Orhun 1995, p. 60 に、更に「アトラス 1896, Taf. LXXXIV, 1-7」掲載の拓本は Orhun 1995, p. 64 に再録されている。この編集者である D. ワシリエフによれば、これらの拓本はロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部の文書館に保管されているとのことである (Orhun 1995, p. 10)。

ただ本遺跡・碑文は、3 人の男性レリーフ像があつて極めて有名であるにもかかわらず、現地調査を行い、碑文を新たに採拓してこれまでの読みを再検討しようとした研究は、意外なことに皆無に近い。

こうした状況を受けて、筆者と鈴木宏節は 2006 年 8 月に、松田孝一大阪国際大学教授を代表とする日本・モンゴル合同調査団の古代テュルク時代の遺跡・碑文調査班メンバーとして、モンゴル科学アカデミー考古学研究所の D. ツェヴェンドルジ所長と 3 年間の学術協定を結び、その後、同研究所研究員の R. ムンフトルガと共に本遺跡・碑文調査を前後 3 回 (2006 年 8 月 24 日、2007 年 8 月 15~16 日、2008 年 8 月 3~4 日) 実施する機会に恵まれた。遺跡そのものの考古学的調査結果は、モンゴル・ソビエト合同調査団メンバーとして 1984 年に同遺跡を訪れたロシア人考古学者ヴォイトフにより既に公表されているので、我々は既知の銘文箇所だけではなく、画像箇所を含む板石全面にわたって、他にも文字が刻まれていないかどうかを確かめつつ採拓作業を行った。⁽²⁾

(1) 詳細については、大澤 2008, pp. 22-28; Bichees 2, pp. 119-128 など参照。

(2) 本遺跡・碑文に関わる我々の調査概要は Bichees 2, pp. 53-55, 92, 109-110 を参照。

その結果、将来した拓本を精査してみるとこれまで知られていなかった多くの箇所にも銘文の跡が窺え、また従来は通説とされてきた字句についても大幅に修正すべきことが明らかになった。特にこれまでの調査ではほとんど顧みられることのなかった東方に横たわる石櫛外碑文については、片面上方に雄山羊タムガ、片面中央には鹿の陰刻像とその周りに摩滅した銘文2行が知られていたに過ぎなかったが、今回の我々の調査では、両表面の摩滅が甚だしく、文字の解読は困難ではあるものの、文字の痕跡が新たに十数行見出された。そして解読の結果、本石櫛外碑文が第一石櫛内の画像碑文と共に、本遺跡の主人公たちがその雄山羊タムガを持つ突厥^{カガン}可汗の一族に連なることを明瞭にするのみならず、彼らの没年、本碑文が作成された年次や作成者の名前についても言及していることが判明した。特に本碑文は、全体的に自らの死を死者自らが悼む字句が繰り返されているのが特徴で、死者たちの生前の功績を讃える「紀功碑文」とは一線を画した「墓碑銘」的性格を持つことを明確に指し示しており、オルホン碑文と通称される突厥碑文の源流やその成立・伝播を考察する上で貴重な事例を提供する。また付属遺物という点でも、この遺跡にはないとされてきた突厥時代の遺跡に特有のバルバル石列が、我々の調査により初めて発見されたことは、石人の代わりとなる3人の男性レリーフ像の存在ともあいまって、本遺跡が突厥第二可汗国時代に作成されたことを決定づけるのである。

本稿は、こうした遺跡調査データに基づき、考古学・文献学や歴史学方面から遺跡の配置構造に再検討を加えるとともに碑文の再読とその内容分析を通して本碑文の主人公の出自氏・部族、碑文の作成状況や碑文の性格を明らかにした上で、本遺跡の持つ歴史的意義について考察しようとするものである。

2. 遺跡の位置・景観と研究状況

本遺跡は、既にヤドリツェフがその日記で記しているように（Ядринцев 1901, pp. 46-48）、ホショー・ツアイダム盆地のオルホン遺跡群からオルホン河に沿って北東に向かい直線ではオルホン遺跡から約 53 km の地点に位置する

(本稿末の付図A・Bを参照)。GPS (全地球方位システム) の計測値によれば、北緯 48° 00' 27.2" 東経 103° 04' 00.5" 高度 1410 m の地点である。本遺跡の南方には、南東方向に延びる高さ約 1900 m の山があるが、そこまではだっぴろい草原であり、背丈の低い草が生い茂っている。遺跡の周辺は草がはだけ、土がむき出しの状態になっている。

本遺跡は、先述した如く、ヤドリンツェフ及びクレメンツによる初期の調査のあと、1963 年にモンゴル人考古学者セル・オドジャブが調査を実施し、石櫛の配置状況や石櫛の銘文箇所のスケッチを行っている (Сэр-Оджав 1963, pp. 91-95; Сэр-Оджав 1970, pp. 44-46; Сэр-Оджав 1977, p. 141)。

その後、1984 年夏にモンゴル・ソビエト合同遺跡調査隊に参加した考古学者ヴォイトフらが部分発掘を行った。同氏は 1986 年に発表した突厥可汗国期の王侯遺跡の分類試論で、これを第三グループの第二クラスとして分類し、西暦 8 世紀中頃のエルデネ・マンダル第二、第三 (II-III) 遺跡やエルデネ・マンダル第五 (V-Va) 遺跡と同じグループに含めている (Войтов 1986, pp. 129-130)。

また 1996 年に彼は、突厥可汗国時代の遺跡を網羅的に体系分類した書物の中で、本遺跡のプランを発表した (Войтов 1996, p. 59, pl. 39 = 次頁 [図3] = Bichees 2, p. 125, Fig. 5)。そして、この遺跡には周溝や土塁の痕跡がみられず、マウンド部分を識別することは困難であると述べ、第一石櫛の寸法を 1.0 m×1.0 m、第二石櫛の寸法を 1.4 m×1.4 m と記し、この遺跡を突厥第二可汗国期の遺跡の中ではツァーガン・オボー第一 (トニユク) 遺跡を代表とする、マウンド西方に 2 つの石櫛が並置された王侯遺跡の第 II グループに属するとみる。その中で II-A グループが 2 つの石櫛が南北軸に並置された形状であるのに対して、本遺跡はヴァリアントのなかで 2 つの石櫛が東西軸に並置された II-B グループに分類されている (II-B-6)。

因みに、これと同じグループに属する遺跡にはエルデネ・マンダル第二遺跡やエルデネ・マンダル第八遺跡が挙げられている (Войтов 1996, pp. 49-52)。なおヴォイトフは先に触れた様に 1984 年の調査の際に作成した遺跡プ

ラン [図3] では、画像碑文の向きをヤドリンツェフの写真スケッチ [図2] と同様に東向きにしているが、石櫛外碑文を第一石櫛の北側板石にもたせかける形で描いている。しかし、これは先に述べたように 1893 年にクレメンツが発見した時点では第一石櫛の東方で横たわっていたのだから、そのように直すべきである。

わが国においては本遺跡の第一石櫛内の画像碑文が 1985 年に山田信夫の著書に引用された他、モンゴル人のツルテムが 1990 年に出版した遺跡写真集の中で本遺跡と画像碑文の様子を鮮明に伝え、その翻訳がわが国にも紹介された (山田 1985, p. 76; ツルテム 1990, p. 44b)。

1990 年夏にトルコ共和国のエルジラスンやセルトカヤなどの研究者が本遺跡を視察して、遺跡現状報告と共に、写真が撮影・発表された。その際には 3 人の男性レリーフ像を持つ板石が根本から掘り返されて、横倒しにされた写真が公表されている (Ercilasun 1991; Sertkaya 1995, pp. 321-322)。また 2001 年にはトルコ共和国の TİKA メンバーが、2004 年夏にはモンゴル・カザフスタ

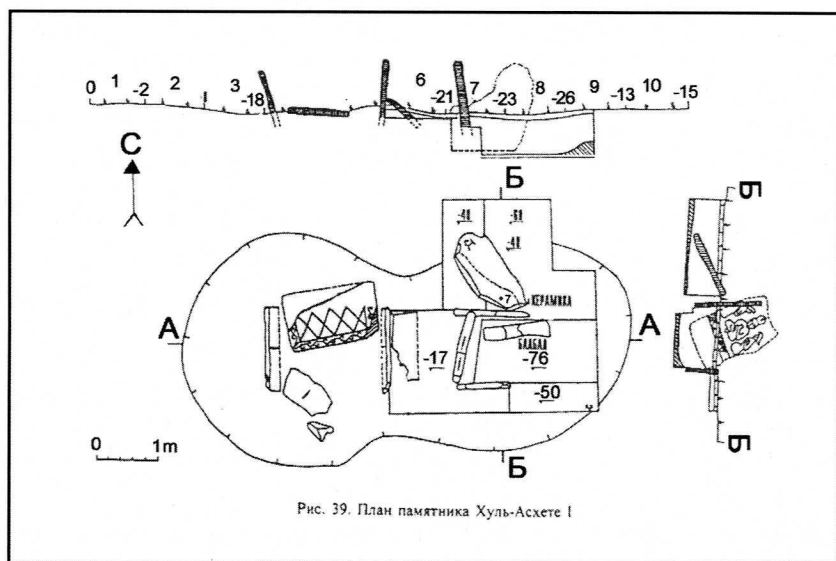


図3：ヴォイトフによる遺跡プラン図 (Войтов 1986, pl. 39)

ン合同遺跡調査隊のメンバーであったバズイルハンが本遺跡を視察し、表面調査を行い、写真、銘文スケッチ、再建形や翻訳を公表している (TİKA 2003; Базылхан 2005, pp. 124-125). 2006 年 8 月に我々が本遺跡を訪れた際には、画像碑文はヤドリンツェフ当時のように画像面が東方には向けられず、南方を向いて立てられていた。このことは 1984 年のモンゴル・ソビエト合同調査隊の調査時に掘り返され、その後、南方に向けて埋め直されたことを意味する。石槨が掘り返された様子は、当時の発掘参加者であるクリヤシュトルヌイが撮影した遺跡写真にレリーフ像の石板が引き抜かれて最下部まで撮影されていることから判明する (Кляшторный & Савинов 2005, pls. 2-3)⁽³⁾。その後、2008 年に我々が本遺跡を訪れた際には中央マウンドの 2 つの石槨と東方の板石は鉄柵に囲まれていた。2007 年秋頃にモゴド・ソムの役人が設置したとのことで、近年モンゴル国で問題視されている金鉱目当ての採掘者らによる破壊から遺跡を保護するためであろう。

3. 遺跡の石槨や付属遺物とその状況

この遺跡は本稿冒頭に述べたように、東西に 2 つ並んだ 2 つの石槨（東側を第一石槨、西側を第二石槨と呼ぶ）からなる。いずれも材石は灰色の花崗岩である。本来ならば遺跡のマウンドが隆起して、その周りが周溝や土塁で囲まれているはずであるが、本遺跡では遠方から眺めると中央部がやや盛り上がり、上がってマウンドがあることが確認できるにすぎない。ただ同時代の遺跡と比べると盛り上がりは欠け、遺跡自体が草原に埋もれている感じで、見つけることは難しい。本遺跡のマウンド中央の東西に並んで 2 つある石槨のうち、西側の石槨を構成するもっとも西の板石は地面からの高さ 67 cm、横 133 cm、厚さ 10 cm、東の板石は地面からの高さ 100 cm、横 140 cm、厚さ 10 cm、両者の中間に斜め横倒しになった板石はその半分が地中に埋もれているが、地上の部分では縦 56 cm、横 113 cm、厚さ 10 cm である。次に東側の第

(3) 但し、ここで掲載された写真は裏焼きされ、左右が逆になっているので注意を要する。

一石槨を構成していたと思われる西板石は地上部分で高さ 70 cm, 横 90 cm, 厚さ 10 cm, 東側の板石は地上部分で高さ 62 cm, 横 160 cm, 厚さ約 7 cm, また 3 人の男性レリーフ像をもつ画像碑文は縦 100 cm, 横 90 cm, 厚さ 10~14 cm, これの西側に斜めに傾けられた石板破片は縦 70 cm, 横 90 cm, 厚さ 7 cm である。そして東方に横たわる石槨外碑文は、雄山羊タムガをもつ面でいえば、膨らんだ箇所縦 155 cm, 横 74 cm, 厚さ 25 cm である。

本遺跡の東側の第一石槨の東側には、古代テュルク時代の石人と同様に、3 人の人物像が、右手で容器を持ち、左手をベルトのあたりに置く格好で浮き彫りされている。またバルバル石については、ヤドリンツェフの調査時のスケッチには第一石槨の北側の隅にはそれらしい石が 4 つ見られるものの、ヴォイトフの調査時にはその中の 1 つと思われるバルバル石が遺跡図に記載されてはいるが、その後の調査ではバルバルの存在は確認された形跡がなかった。我々も 2006 年夏と 2007 年夏に当地を訪れた際には見つかることはできなかったが、2008 年 8 月

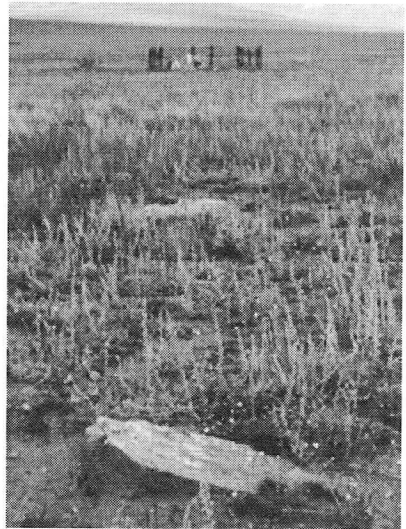


図 4：本遺跡東方のバルバル石列
(2008 年 筆者撮影)

の調査では、本遺跡の第一石槨から東方に 37 m 離れた地点で、ヴォイトフの遺跡図で第一石槨内に書き入れられていたバルバル石と酷似する石柱を見つけることができた（第一バルバル）。またこの東方にも 5 個のバルバル石断片を見つけ出すことができた。2008 年夏の時点で、本遺跡では計 6 個のバルバル石断片が確認されたことになる [図 4]⁽⁴⁾。これらバルバル石が本遺跡で発

(4) 本遺跡の東方に続く 6 個のバルバルの GPS 計測値、寸法や形状については Bichecs 2, pp. 109-110, Pic. 58 を参照。

見されたことは、マウンド中央の2つの石槨、通常の石人に相当する画像、そしてルーン文字碑文の存在と共に本遺跡が突厥第二可汗国時代の典型的な遺跡であることを示しており、大きな意味を持つといえる。

さて、マウンド中央の2つの石槨は「アトラス」掲載の遺跡スケッチ当時から見てもかなり破損がみられ、東側の第一石槨は東側、北側、南側の各板石がやや外側に倒れかけた状態で地面に埋め込まれている。またここから東方の場所で横倒しにされていたタムガの刻まれた石槨外碑文は、灰色花崗岩からなる。表面はやや粗く、画像や銘文の多くが摩滅している。

4. 銘文を持つ板石の形状

(1) 画像碑文の3人の男性レリーフ像の形状

3人の男性レリーフ像が東面に刻まれた板石は縦が100cm、横が90cm、厚さは10~14cmである。画像の描線の幅は約1cmである。3人の中でも中央の人物がひと回り大きい。烏帽子状の帽子を被り、右手指が壺型容器の右側で指を握っている形に描かれている点から判断すると、どうやら容器の右側には取っ手があり、これを握っているのであろう。左手は腰のベルト附近に置いている。その人物像の右腰には、丸い革袋を吊り下げた様子が窺える。座高は80cm、肩幅30cm、顔の大きさは縦35cm、横21cmである。足にはブーツ状の靴を履き、胡座をかいた姿で坐っている。

中央の人物から向かって左側には、やや小振りな人物が頭を中央の人物に左に向けてやや斜め座りに描かれている。この人物も右手で壺の容器の底の箇所を支えている。また左手もベルトのあたりにおろされてはいるが、詳細は不明である。脚部も胡座をかいているのか、正座なのか、判別できない。像の高さ67cm、横幅26cm。

中央の人物を挟んで右側に位置する人物は耳元から後頭部まですっぽりと覆う烏帽子風の帽子を被って、顔を中央の人物に向け右向きの姿勢で描かれている。やはり右手には壺状のカップをもち、左手をベルトのあたりに垂ら

しているようである。脚部まで描かれてはいないが、全体像から見て、中央の人物に対してひざまずいた姿で描かれているようである。像の高さ 68 cm, 横幅 24 cm [図 5]。

更に注意すべきは、この東側の右上端には最初の証言者であるヤドリンツェフを含む多くの研究者が認めているように「鷹」,「隼」,「鷲」などの一羽の猛禽が石板に向かって左向きに羽を休めて留まった姿が浮彫りされている。頭部から尾の先までの長さは 22 cm, 更にその下には突厥王族の阿史那氏族に特有の雄山羊タムガが刻印されて



図 5：画像碑文の正面レリーフ
(2008 年 鈴木宏節撮影)

おり、その高さは 9 cm で横幅は約 5 cm である（第 8 節の [図 14] を参照）。そしてその石槨の外周には、一見して上面から左右の面に古代テュルク・ルーン文字が彫られている。その大きさは 3.5~5 cm ほどの寸法である。またこの板石の裏面にも、ローマ字のアルファベットの S 字をなぞるような牛耕方式で刻字されている様子が観察できる。その後で、S 字の上部のスペースから下部のスペースを埋めるような配置で文字が彫られている。

（2）東方で横倒しされた石槨外碑文上のタムガと鹿の形状

次に石槨の東方で横たわる細長の板石であるが、雄山羊タムガの刻まれた側のほうが裏側の鹿像がある側よりも摩滅が激しいことからすれば、これが上向きで放置されていたと考えられる。雄山羊タムガのある面についての情報はほとんどなく、2003 年にトルコ共和国の TİKA メンバーによる報告中の写真がこの面のタムガの存在を伝えるのみであった。ましてやこの面に文

字があるかどうかはこれまで報告されたことがなかったが、我々が初年度にタムガの下部を部分採拓した結果、そこに3つのルーン文字が彫られていたことが分かった。一方、その裏面には、1896年の「アトラス」に掲載されたクレメンツの拓本から、板石の中央のやや下部より石板に向かって右側に頭を向けた一匹の鹿の立像が陰刻されているのが知られている。計測によれば、鹿の高さは21 cm、鼻先から尻尾までの幅は22 cmである〔図6〕。

その形状は青銅器時代の鹿石や同時代の岩絵に見られるような体を斜めにして、角が異様に伸びぎった鹿の様相とは明らかに異なり、2001年8月にトルコ共和国のTİKAによりビルゲ・カガン遺跡の西方マウンドの犠牲石北側の地点の銀製箱から見つかった銀製の2匹の鹿の立像（TİKA 2003, p. 133, pl. 37）や、ザヴハン県ウリヤスタイ市東方のムングト・ヒサー碑文西面の左上部に陰刻された、突厥の貴人が胡座する玉座の脚部を支えるべく向かい合う2匹の雄鹿の立像（Bichees 2, p. 41, Pic. 27-(1)）を彷彿とさせるものであり、いずれも突厥期に刻まれたとみなすことができる（Osawa 2009, pp. 406-407, figs. 2, 3）。またこの鹿はその刻線の幅や深さもそれを取り囲むルーン文字のそれと近似値であること、その文字も鹿の像と重ならないように微妙に配置されて刻まれている点からみて、両者が同時に刻まれたことはほぼ確実であろう。但し、この面全体の彫りの残存状況は正面部のそれと比べると、鹿を取り巻く文字群は比較的よい状態を保っているといえるが、鹿の角の上方の刻面は深くえぐられた上に摩滅も激しいため、文字を判読させにくくしている。



図6：石櫛外碑文東面の鹿像
（2006年筆者撮影）

5. 画像碑文と石槨外碑文の向き

第3節で紹介したように、ヴォイトフは1996年の本遺跡図〔図3〕に1個のバルバル石の存在を記しながら、突厥遺跡分類表（Войтов 1996, p. 50, Tab. 2）にはこのバルバル石を含めていない。しかし前述のように、我々は2008年8月の調査で彼の遺跡図に記された石柱と酷似するバルバル石1個と共に、その地上部がほぼ破壊されて地面に埋め込まれた5個の、計6個のバルバル石を確認している。

因みにヴォイトフは1986年の論文で、ホル・アスガト遺跡の3人の男性レリーフ像の前には、「以前、胸のあたりに雄山羊タムガをもち、背中にはこれまで知られていないルーン文字銘文をもつ、2つの人型をした石碑があった」ことを記している（Войтов 1986, p. 130; 林 1996, p. 216）。林俊雄はその紹介の中でこのヴォイトフの「人型の石碑」というロシア語を石製人物像とみて「石人」と訳している。しかし発見当初のヤドリツェフ自身の調査日記にはそのような石人らしき遺物に関する記述は確認できないし、発見当初の1891年8月時点でヤドリツェフが撮った写真をドゥディンが描き起こした遺跡全体のスケッチにもこれに相当する遺物は確認できない。筆者はここで、ヴォイトフが「статюя люди 石人」とは記さずに2つの「антропоморфны стелы 人型の石碑」と記している点に注目する。それは筆者もメンバーとして参加した1996～1998年の日本・モンゴル合同遺跡・碑文調査の際にオルホン遺跡群には、被葬者の像、従者を象った石人、人間の顔や手が彫られたバルバル石の他に、その形が人間の姿に似せて作られたバルバル石がマウンド内部にも立てられていることが確認できたからである。その中には胸部に雄山羊タムガが刻まれたものも含まれていた。

例えば、キョル・テギン遺跡やビルゲ・カガン遺跡⁽⁵⁾のマウンド内部、さらには第三オルホン遺跡（無名墓Ⅰ）やオンギ遺跡のマウンド内部に立てられ

(5) ビルゲ・カガン遺跡・碑文、キョル・テギン遺跡・碑文は、突厥第二可汗国の第三代可汗とその実弟の紀功遺跡・碑文であり、各々735, 732年に作成された。これらはその建造地がオルホン河東方のホショー・ツアイダム盆地にあることから「ホショー・ツアイダム遺跡」とも称される。またこれらの碑文はトール河流域のバイン・ツオクトの地に立てられたトニユククの碑文と合わせて「オルホン碑文」と呼ばれる。

た人型バルバル石はまさにそういったバルバル石であった（アトラス 1892, Taf. XI-XII, XIV; 林 2005, pp. 63-64, figs. 93, 94）。またオング遺跡やビルゲ・カガン遺跡の東方に延びるバルバル石列には、短いながらもそれが如何なる人物によって立てられたかを示すルーン文字銘文が刻まれているものも複数存在する（大澤 1999a, pp. 278-282）。

また 2006 / 2007 年夏の我々の調査の際にも、例えば、トーラ河中流域にある古代テュルク時代のウングト遺跡の、複数の粗い花崗岩製の石人からは、その背面に同遺跡に共通するタムガが刻まれていたものを複数、確認することができた（Bichees 2, pp.19-22, 60-63）。もしヴォイトフの上記の記載が他の遺跡と混同していない情報に依拠しているのであれば、彼のいう「人型の石碑」とは、上記の突厥時代の王侯や高官の遺跡に見られるマウンド内部に立てられた人型バルバル石であった可能性も考えられる。本遺跡で言えば、「アトラス」所収のスケッチからは、レリーフ像をもつ石槨前方には 4 つほど、細長い石が横倒しにされているが、あるいはこの中の 2 つを指しているのかもしれないと思い、2006 / 2007 年の現地調査時に遺跡の周辺を捜査しては見したが、何ひとつ確認できなかった。むしろ筆者はここに言う「人型の石碑」とは、ヴォイトフに情報を与えた人物による憶測、もしくは思い込みとみなすべきで、現時点で「雄山羊型のタムガを胸のあたりに持ち、その背後にルーン文字を持つ石碑」を求めるならば、マウンド中央にある 2 つの石槨の東方に横倒しにされた石板、即ち筆者のいう、石槨外碑文こそがこれに該当するだろう [図 7]。

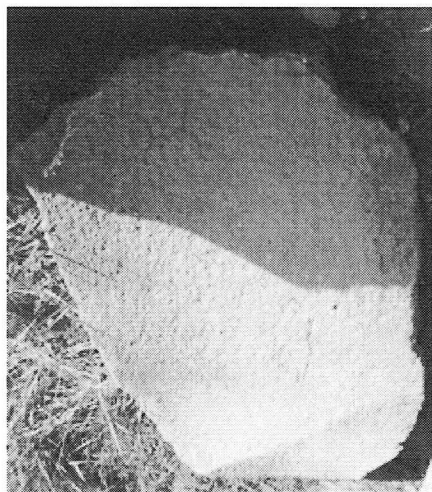


図 7：石槨外碑文の西面の雄山羊タムガ
（2007 年 筆者撮影）

また以前にこのような「石碑が2つあった」という点についてであるが、筆者の考えでは、これはマウンド中央に位置する東側の石槨に付属する画像碑文をもつ板石とその東方に横倒しにされた雄山羊タムガ、鹿像とルーン文字を持つ石槨外碑文、の2つを指すと解釈できる。この種の伝聞情報は何らかの事実を含んでいるとはいえ、そこには情報提供者自身による錯誤や思い込みも含まれていることも考慮すべきであろう。

こうした考察を踏まえた上で、発見時から現在まで一貫してマウンド中央の2つの石槨の東方の第一石槨内に立てられた3人の男性レリーフ像の刻まれた画像碑文と、その第一石槨からやや離れて東方に横倒しにされた石槨外碑文の本来の設置場所がどこであったのか、という点について考えてみよう。この問題は換言すれば、この2つの碑文が果たして石槨の一部なのか、バルバルに相当するのか、それともそれ以外のものなのか、という点を明らかにすることに繋がってくる。ラドロフ以来の文献学者たちは前者の画像銘文と並んで、この後者の石槨外碑文も、遺跡の一部とみなして第二石碑と記してはいるものの、その本来の場所や各面の向きについては全く言及していないのである⁽⁶⁾。

遺跡の配置については〔図8〕からも窺える。向かって左から第二石槨の西面と東面、次に第一石槨の西面、次に画像銘文の板石、次に第一石槨の東面、その東には石槨外碑文が倒れている。ただ画像碑文石は本来、画像を東向きにしていたものが、1984年以降、南向きに埋め置かれている。

さらに、この点について、当初、筆者は前者の画像碑文とともに、後者の石槨外碑文についてもマウンド中央にある2つの石槨遺跡の一部をなしていたのではないかと推測し、2008年の仮報告では、画像碑文を第一石槨の東面板石に、その東方に横たわった石槨外碑文を第二石槨の板石の一部とみな

(6) 例えばラドロフは上の各銘文部に対しては A, Aa, Ab と配列し、オルクンは lh. a, lh. b, lh. c と、またマローフは第一碑文の表面、その裏面、そして第二碑文と順に記していることから窺い知れるが、いずれの研究者もこの板石が本来設置されていた場所や板石の向きについて言及はしていない (Radloff 1895, pp. 257-258; Orkun 1938, pp. 122-123; Малов 1959, pp. 44-45)。

したが、その本来の位置については再検討を要すると記した（大澤 2008, pp. 29, 31）。この件に関して、我々がここ 3 年間に実施してきた現地調査の成果によれば、阿史那氏族に特有のタムガをはじめとするタムガが多い板石に刻まれているのを観察できた。例えば、第二突厥期に再利用されたとされるトヴ県アルタンボラク・ソムにあるウンゲト遺跡の西側石櫛の南と東側の板石の両端部には縦に並列される形で阿史那氏の雄山羊タムガを含む 5~6 個の各氏族のタムガが刻まれ、同様にマウンド中央の石人にも背中に雄山羊タムガが地面に垂直に刻まれているのを発見した（Bichees 2, pp. 20-22, Pics. 10, 12）。またウブルハンガイ県ズーン・バヤーン・オラーン・ソムのズーン・バヤン・オラーン遺跡やハラ・ウズール第一、第二遺跡などの碑文を伴わない遺跡の石櫛に雄山羊タムガが刻まれる際には、その横長にした石板の表となる箇所両端か、片側に雄山羊タムガが地面と平行する位置に刻まれていることにも気づいた（Bichees 2, pp. 74-78, Pics. 40, 41, Fig. 4）。本遺跡の問題の石櫛外碑文では両面に文字が刻まれ、かつ雄山羊タムガに加えて、その背面には鹿が地面と水平に刻まれていることから、板石は雄山羊タムガが自然の立姿に見えるように地面に縦長に立てて埋め置かれたとみなすべきであろう。画像碑文、石櫛外碑文とともに、表裏の両側に、ルーン文字銘文

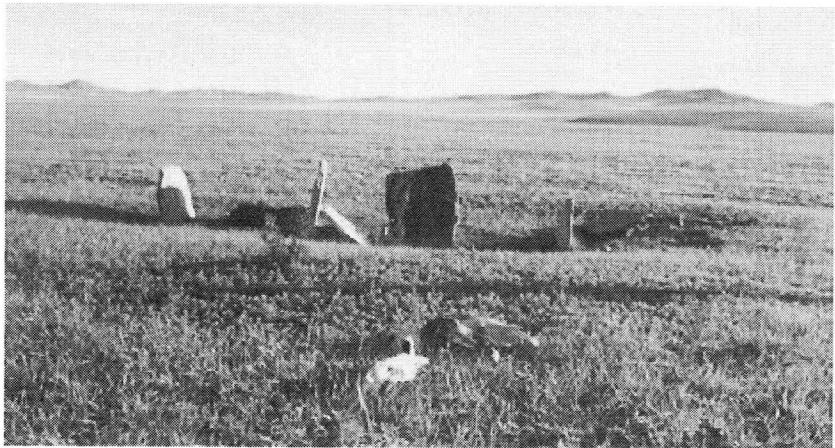


図 8：遺跡南方から見た遺跡の様子（2007 年 筆者撮影）

が刻まれていることから、これらの碑文が中央マウンドの第一石櫛、第二石櫛の側板石や覆い石であったとは考えにくい。何故ならタムガ及びタムガを伴うルーン文字面や鹿像を伴うルーン文字面は本来、ここを訪れた人に見てもらうことを意識して刻まれたに相違なく、石櫛の裏側や石櫛の覆い板の裏側などこれらの刻面が隠れてしまうような配置にはなかったと考えるべきである。

では、この銘文を表裏両面に持つ2つの石板(画像碑文と石櫛外碑文)は本来、どこに設置されていたとすべきであろうか？

まず、3人の男性レリーフ像を持つ第一石櫛の石板であるが、これについては、3人の男性レリーフ像が古代テュルク時代の石囲い遺跡の東辺の外側に東方に顔を向けて立つ石人と同じ機能を果たしていたとみるヤドリントェフ、エヴュティホワやセル・オドジャブ、キズィラソフらの解釈が参考になる。私見では、その背面に位置する石囲いがいかなる機能を持つ遺跡なのかという点については、これが王侯遺跡の場合、たとえばキョル・テギン遺跡やビルゲ・カガン遺跡の場合では、被葬者本人を象った石人とその妻の置かれた廟の後方に置かれた犠牲石が該当せしめられよう。本遺跡の場合、石板に刻まれた3人のレリーフ像の人物が被葬者を含む場合、この板石の位置は2つある石櫛のなかで、東側の石櫛の中央で東方を向いて立てられたと見るのが至当である。事実、「アトラス」所収の最初期の遺跡スケッチ [図2] でも、また1984年にここを訪れたヴォイトフ作成の遺跡プラン [図3] でも、画像碑文は第一石櫛の真ん中あたりに画像を東方に向けて設置されているのが確認できる。⁽⁷⁾

(7) 筆者は1996年8月29日に森安孝夫大阪大学教授を代表とする日本・モンゴル合同調査隊員としてアルハンガイ県エルデネマンダル・ソムのイフ・ハヌイ・ノール遺跡を訪れた。そこではホル・アスガト遺跡と同様にマウンド中央には東西に2つの石櫛が配され、その東側の石櫛の東側には牛耕式に刻まれた銘文が正面から見て左右に刻まれていた。我々が訪れた際には頭の欠けた石人が2つ東側石櫛の外側の東方に置かれていたが、1909年にラムシュテッドとバルシがここを訪れた際には石人のひとつが東側の石櫛内部に置かれていたことを伝える写真が掲載されている(MSSP, p. 128, pls. 72, 73)。実はそれに先立つ1891年にこの遺跡・碑文を最初に

一方、東方に横倒しにされた石櫛外碑文の形を見ると、中央上部がややとんがり、その中央からやや下部中央に雄山羊タムガが地面と平行して刻まれていることから、この板石は長細い方の辺を垂直にして立てられたと見なそう。そして筆者の考えによれば、この雄山羊タムガ下に右から左に彫られたルーン文字の行（翻字では Asgat-IIa, W4 に相当する）は他の箇所 비해、大きな文字で彫りも深く彫られていることから見て、この部分が本文の冒頭と見なせる。一方、このタムガの上部に記された文字は極めて薄く、判読が難しい形であることも含めて、冒頭の行の後に刻まれた、いわば碑額文に相当する文面と見なせる。こうした点から見れば、本石櫛外碑文は石櫛の一部ではなく、独立した石碑と見なすのが適当である。

では、この石碑の正面はどちらであったのか？

既に筆者が別稿で指摘しているように、突厥第二可汗国時代の突厥王侯の碑文については、1958 年のチェコ・モンゴル合同調査隊によるキョル・テギン遺跡のマウンドの発掘調査及び 2000 年以降のトルコ・モンゴル合同調査隊によるビルゲ・カガン遺跡のマウンドの発掘調査からは亀趺が西方を向けられていたことが判明しており、その場合には当然、碑文の正面は漢文面と突厥文面および同時代の漢文史料との検討から亀趺の頭が向けられた西面を正面（碑陽）としていたことは明らかである。このことは碑文が西方に位置する被葬者自身のレリーフ像（石人に相当する）を安置する廟に向けられて配置されたことを意味する。ただしキョル・テギン碑文とビルゲ・カガン碑文については、本来なら被葬者を祀る廟のある西方に向けられた西面には阿史那氏族のシンボルである雄山羊タムガを碑額にもつ突厥文面が記されるべき

発見したクレメンツもその石櫛内部に石人が置かれていたことを目撃しているのである（大澤 1999b, pp. 137-138）。ここから筆者はイフ・ハヌイ・ノール遺跡でも石人は本来、東側の石櫛の内部にあったと考える。またラドロフはこの銘文の字体が本ホル・アスガト碑文とよく似ていることを指摘し、クリャシュトルヌイはホル・アスガト碑文をイフ・ハヌイ・ノール碑文と共に 8 世紀に年代付けしている（АТИМ, р. 259; Кляшторный 1978, р. 243）。このように遺跡構造や碑文の字体などの近似性から見て本ホル・アスガト遺跡でも画像碑文は第一石櫛内部に 3 人の男性レリーフ像を持つ面を東方にして立てられていたと考えられる。

ところを、墓廟建造当時の突厥と唐との密接な関係を弔問に訪れた内外の人々に政治的にアピールすべく、突厥側が唐の権威を利用する形で、唐工が刻んだ漢文面を正面に据え置いたという事情を考えると、これは例外的な措置と見なせよう。むしろ参考にすべきは第二突厥期の王侯の遺跡として初期に建造されたツァガン・オボー第一碑文（トニユクク碑文）である。この碑文における書き出し面は、碑額に当たる上部の中央に、逆三角形とその下部に横線を持つ本遺跡の被葬者トニユククが出自する阿史德氏のタムガが刻まれ、同面の左側面から大きな文字でトニユクク自身の生年および当時の突厥人の境遇を伝える文章が始まる面であり、この面は彼とその妻の石人の安置された廟に対して、ちょうど西方に向いている。2006年夏の我々の調査によれば、トニユクク碑文の2つの石碑のうち、南側の第一碑文は真西からやや北側に3度ほど偏って立てられており、もうひとつの北側の第二碑文は逆に、真西から南に約15度偏って立てられていることが判明しており、その場合、2つの碑文は死者の靈魂の宿る廟や石人の位置が扇の要になるように配置されており、これらが被葬者自身を象った石人を安置していた廟やその後方の追悼用の石槨のほうに向けられるように置かれていたことを意味する（大澤 2007, pp. 27-31; Bichees 2, p. 11）。さらには文脈から西面を書き出し部分と見なし得るイフ・ホショート（キュリ・チョル）碑文のケースからも、本来、碑文は被葬者キュリ・チョルの靈魂の眠る側、即ち碑文の場所からは西方に向けられて、そこから書き始められ、その後東側の面、さらに北側へと文字が移行していく様子が窺える。こうした状況からすれば、突厥期の碑文は本来、西面こそを第一面、すなわち正面として設置されていたとみなせよう。⁽⁸⁾ 本碑文

(8) この見解からすれば、オング碑文に関しても亀駄の頭と碑文は、マウンド西方にある石槨および被葬者を象った石人が安置された廟に向けられた西面を第一面として配置されていたとみなすべきである（Bichees 2, pp. 67-68, Fig. 4）。既にこの見解は古代テュルク時代を扱う D. バヤルなどのモンゴル考古学者らにも共通認識されており、現地では2007年夏以降、キョル・テギンおよびビルゲ・カガンの各遺跡では亀駄のレプリカは西向きに再現されている。いまだに一部の研究者には、かつてノブゴロドヴァによって提唱されたキョル・テギン遺跡の推定復元図

でも西面にタムガを持つトニュクク碑文の構造に依拠して石櫛外碑文では雄山羊タムガのある面を正面（西面）と見なしておく。

ちなみにヴォイトフが自身の遺跡分類表で本遺跡の3人の男性レリーフ像を他の遺跡における石人の項目に入れているのは、エヴィテュホワやセル・オドジャブと同じ見解を踏襲するものであり、ラドロフの読んだ人名の当否をぬきにすれば、男性レリーフ像の扱いという点でいえば先の筆者の見解とも一致する。また、彼は3人の男性レリーフ像をもつ画像碑文を真ん中に持つ第一石櫛の東方で横倒しになっている石櫛外碑文の片方には雄山羊タムガが、その裏には鹿の像が描かれていることを述べている。この点では彼はこの後者の碑文を石櫛の一部とみなしているように、これが石碑であるとは考えていないことはその分類表の碑文項目には何も記載していないことから明らかである。但し東西に並んだ2つの石櫛のうち、東側の第一石櫛が廟の機能を持ち、西側の第二石櫛は追悼場所の役割を担っているという彼の見解は、筆者が上で述べた画像を持つ板石の機能からも支持できよう。

6. 銘文の調査・研究

銘文研究については1895年のラドロフの解読に続いて、オルクン（Orkun 1938, pp. 121-127）がルーン文字の活字転写、ローマ字転写とトルコ語訳を公表しているが、一部の改訂を除けば、基本的にラドロフの読みを踏襲している。但し特筆すべきはアトラス 1896, Taf. LXXXIV から東面石櫛の背面部の原拓本

（Новгородва 1981, p. 210, Fig. 3; Nowgorodowa 1980, p. 240）における東向きの亀趺や参道脇の坐像の位置をそのまま受け入れるものもいるが（cf. Stark 2009, p. 497, pl. 31a），筆者の考察を踏まえればもはや受け入れられるものではなく、完全に過去のものである。この点、1999年のピチェース報告では筆者も、東方を聖なる方向と見なしていたという観点から、キョル・テギン碑文の亀趺も東方に向けられていたと見た先のノブゴロドヴァ説に引きずられて、オンギ碑文の亀趺も東面に向けられ、そこから碑文の第一面を東面、第二面を北面とみなした経緯がある（森安・オチル 1999, pp. 128, pl. 3a）が、これについてはその後の調査報告などで随時、補正した見解を述べており（Osawa 2008, pp. 164-167; Bichees 2, pp. 67-68），改めてこの機会を利用して訂正させていただきたい。

を除く図版を再録している点で、「アトラス」を容易に参照しえない研究者には利用価値が高いものである。次にロシアのマローフもルーン文字の活字体と転写、翻訳を發表しているが、やはり一部の字句の読みを訂正するものの、基本的にはラドロフの読みを踏襲している (Малов 1959, pp. 44-46)。その後、1963年にセル・オドジャブが本遺跡の調査を行う傍ら、碑文のスケッチを残してはいるが、銘文の解釈ではマローフの解釈をそのまま受け入れて、これを「アルトゥン・タムガン・タルカン」の碑文と命名している (Сэр-Оджав 1970, p. 46)。その後、リンチェン は自らの碑文集成本で画像のある板石の一部と裏面部の銘文に関するスケッチと写真を掲載してはいるが、解読には至っていない (Rintchen 1969)。またボルドも碑文の写真や銘文部のスケッチを行ってはいるものの、銘文の読みではラドロフ、マローフの読み以上のものではない (Болд 1990; Болд 2007)。2000年にはハンガリーのトルコ史家のドブロヴィチも先のボルドと現地を訪れ、トルコ共和国の TİKA のメンバーの一人が採取した部分拓本に依拠して再読を試みているが、オリジナリティーには乏しいと言わざるをえない (Dobrovits 2007)。

さて上記の研究者達が全面的に依拠したラドロフの拓本については、先に述べたように、原拓本をもとに彼が判読した文字を、再度拓本の上に再現させた修正拓本が横に付せられて、あたかもこの修正拓本が原拓本であるかのような印象を読者に与えてきた。ラドロフとしては自らの読みを分かり易い形で示したかったと思われるが、モンゴル人を除けば、西側諸国の研究者の多くが現地の遺跡を直接調査して拓本をとることができなかったために、ラドロフの修正拓本が唯一の根本史料として用いられてきた事情は仕方のないものであった。しかし現地調査が可能となった今、従前の如くラドロフの修正拓に依拠するだけでは、怠慢との批判を免れまい。事実、2001年夏には TİKA の遺跡調査メンバーなどが同地を訪れ、写真撮影や表面調査を実施しており (TİKA 2003)、それ以後もモンゴル人研究者の Ts. バットルガやトルコ

人研究者のアルユルマズ准教授らの調査隊が複数回にわたり本遺跡を訪れて、拓本を採取したというものの (Alyılmaz 2007, p. 176), 今なお解読成果は現れていない。こうした中で我々、日本・モンゴル合同調査隊は銘文部を含む 2 つの石板の表裏を全体にわたって採拓する作業を実施したのである。

7. テキスト

テキストの翻字、転写や和訳に入る前に一言申し添えておきたい。それは、本碑文が突厥第二可汗国時代の遺跡に属するにもかかわらず、周知の如く、突厥の可汗一族や高官の諸碑文に共通する、被葬者の生前の功績を声高に述べた「紀功碑文」とは一線を画しており、むしろ死者の死を哀悼する文章が随所に見られる点である。例えば、本碑文では主人公の死を悲しむべく、死者たち自身の言葉として「我が褐色の地に、我らは別れた!」、「ああ、悲しい!」、「残念だ!」といった文句を多用する。その意味では本碑文はイエニセイ碑文に特徴的な、死者自らが自らの無念の思いを伝える墓碑銘と見なしうるものである。こうした大まかな特徴をひとまず述べたうえで、以下のテキストについて解読・分析を進めていきたい。

(1) 翻字と転写

以上の考察を踏まえ、現時点で、筆者が拓本から判読できた各面各行について、翻字 (Transliteration)、転写 (Transcription)、和訳の順に記載する。なお本テキストの翻字・転写・翻訳における原則については、森安・オチル 1999, pp. 119-120 に依拠している。また行順については、各行の彫りの深さや文字の大きさを優先してその進行方向を辿っていった結果であり、牛耕方式に進行して次行に移行していくものについては、刻銘位置や内容の連続性を勘案した上で、提示する。なお、冒頭の行番号は、併せて掲載する筆者の描いたスケッチ上に矢印で示した行番号に符合するものである。

Asgat-Ia : マウンド中央の東側の石槨内にある画像碑文東面

East side – Recto [図9]

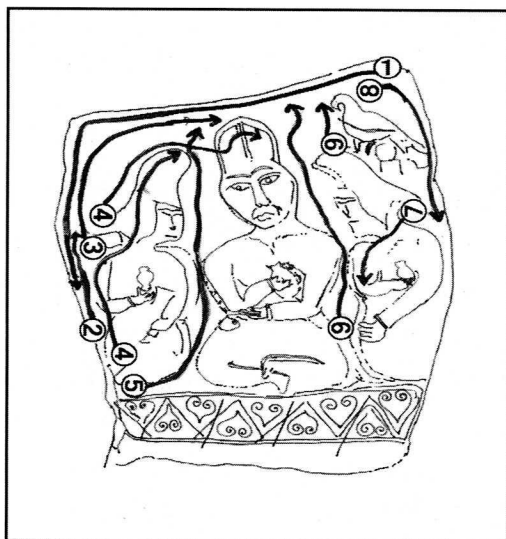


図9：画像碑文東面の銘文 (①～⑧)

翻字

E1 šNš:külTWDNinsi:LTW:.....RQ::YGzy...ka:DR..

...

E2 zGNz:bdzn:bdzms

E3 YGz[:]yrmka(:)DRLDmz:a

E4 ūza:tjrimka:SRa:YGz:yrmka:DRLDmz:a:Qηma:b
ükmdmz:üğma:bükmdmz:a:

E5 tjrimka:DRLDmz(:)a:YGzyrmka(:)DRLDmz..

E6 ūza:tjrimzka:YGz:yrmkä:DRLDmz:a:

E7 SRa:Ygz:yrmzka:DRLDmz

E8 pa:ygn:irkn:bdzms

転写

- E1 ašīnas : köl tudun inisi : altu[n : tamyan : ta]rq[an] : yayız y[erim]kä :
ad[irildimiz : a :]
- E2 azyanaz : bädizin : bädzämiş
- E3 yayız : yerimkä : adirildimiz : a
- E4 üzä : täñrimkä : asra : yayız : yerimkä : adirildimiz : a : qañim a :
bökmädimiz : ögäm ä : bökmädimiz : ä :
- E5 täñrimkä : adirildimiz : a : yayız yerimkä : adirildimiz[: a]
- E6 üzä : täñrimizkä : yayız : yerimkä : adirildimiz : a :
- E7 asra : yayız : yerimizkä : adirildimiz
- E8 apa : yegän : irkin : bädzämiş

Asgat-Ib : マウンド中央の東側の石槨内にある画像碑文西面

West side – Verso [図 10・11]

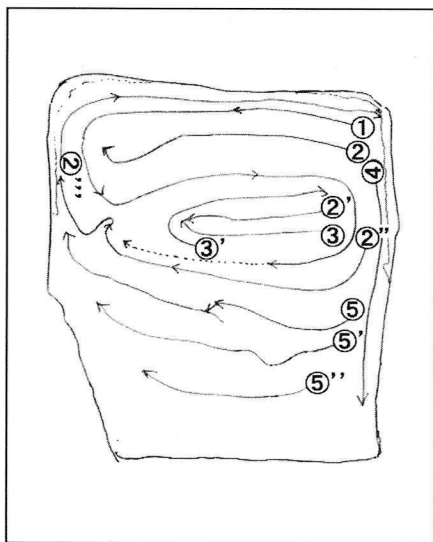


図 10 : 画像碑文西面の銘文 (①～⑤'')

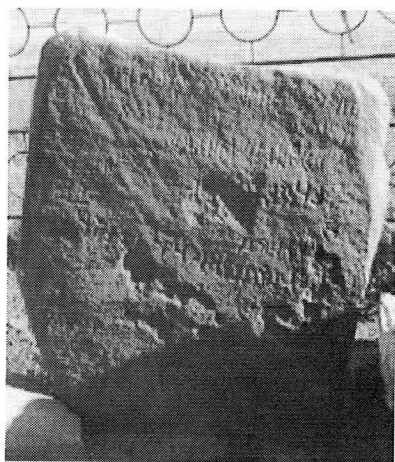


図 11 : 画像碑文西面の写真
(2008年 鈴木宏節撮影)

翻字

- W1 (š N š :) ü k ü l : T W D N : i N s i : L T W N T m G N : T R Q N : Y W G i
 W m D u Q : ü č n : D R l t m z : a : Q L L m a : ü l g : W Y R L G r m s : Q L
 L m a : k[ü](n)(: Y : b ü k m d m z a : s z m a)⁽⁹⁾
- W2 (T R Q N) W G L R i : T Y G Ñ L R i k ü (n ü) č n : L Q Z N (y l) [q] (a)
 B R D ŋ z : a : s z a s z (m a) (Y G z y r m k a :) D R L m s č a : S Q N
 W R r t m : a : D R L W : (B R D m z : a :) (ü z a : t ŋ r i m k a : Y G z :
 y r m k a) D R L D m z : b ü k m d m z : Y T a)
- W3 Y G z y r m k a : D R L D m z a : s z m a : s z m a y r m z a D R L D m z a
 Y G z y r m z a S z m a⁽¹⁰⁾
- W4 (Y G z y r m k a : D R L D m z a : s z m a : Y T a :)⁽¹¹⁾
- W5 p a y g n (i r k n) T W u q i (T D m : b ü k m d m z a :)
- W5' i N s i z G N z T W u q T d m : s z m a :
- W5'' (Y T a s z m a : Y T a :)⁽¹²⁾

転写

- W1 ašinas : köl : tudun : inisi : altun tamyan : tarqan : yoyi umaduq : üçün
 : adiriltimiz : a : qalalim a : ölüg : uyarliy armiş : qalalim a : kün : ay :
 bökmädimiz ä : äsizim ä
- W2 tarqan oyul(l)ari : tayyunlari kün üçün : laqzin yilqa bardinüz : a : äsiz ä
 äsizim ä yayiz yerimkä : adirilmışca : saqinur artim : ä : adirilu : bardimiz : a
 : üzä : tägrimkä : yayiz : yerimkä adirildimiz : bökmädimiz : yita

(9) この部分の文字はやや小さい。

(10) この部分は、深く彫られている箇所である。

(11) この部分の文字はかなり大きい。

(12) この部分の文字は中程度の大きさから、かなり大きなものまで幅がある。

W3 yayız yerimkä : adırıldimüz a : äsizim ä : äsizim ä yerimiz ä adrıldimüz a
yayız yerimiz ä äsizim ä

W4 yayız yerimkä : adırıldimüz a : äsizim ä : yïta :

W5 apa yegän irkin toqïtdim : bökmädimiz ä :

W5' inisi azyanaz toqïtdim : äsizim ä :

W5'' yïta äsizim ä : yïta :

Asgat-IIa : マウンド東方の石櫛外の碑文, 雄山羊タムガのある西面

West side – Recto [図 12]

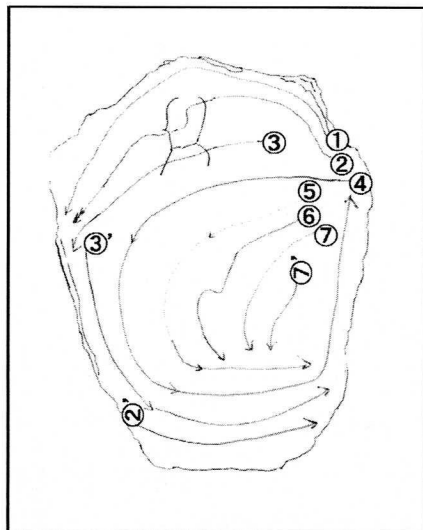


図 12 : 石櫛外碑文西面銘文 (①~⑦')

翻字

W1 (Y G z y r m k a : D R L D m z a : S R a : Y G z : y r m k a : D R L D m
z a)⁽¹³⁾

(13) この部分は縦長のやや小さい文字 (高さは約 4~6 cm).

- W2 ü z a : t ɣ r i k a : S R a : Y G z y r m k a : D R L D m z : a : y r m k a :
 D R L D m z : a : Y T a : S R a : Y G z : y r m k a : D R L [d m z : a
]⁽¹⁴⁾
- W3 (y r m k a : D R L D m z a : Y T a : s z m a :)
- W4 (š N š :) ü k ü l : (T W D W N : i N s i : L T W N : T M G N : T R Q N :
 Y G z y r m k a : D R L D m z a : Y G z : y r m k ä : D R L D m z : a : s
 z m a :)⁽¹⁵⁾
- W5 W (G L R i : T Y G N L R i : k ü n : ü č n L Q z N : y L Q a : B R D ɣ z : a :
 Y T a : s z a : ü l g m n : ü č n : Y W G L Y i : b r t m z : a :)
- W6 (p a : y g n : i r k n : T W u q i t d m : a : Y T a)
- W7 (z G N z : T W u q i T D m : a : a s z m a : Y T a : s z m a :)⁽¹⁶⁾

転写

- W1 yayız yerimkä : adirıldimiz a : asra : yayız : yerimkä : adirıldimiz a
- W2 üzä : täŋrikä : asra : yayız yerimkä : adirıldimiz : a : yerimkä : adirıldimiz :
 a : yïta : asra : yayız : yerimkä : adirıl[dimiz : a : ///////////////////]
- W3 yerimkä : adirıldimiz a : yïta : äsizim ä :
- W4 ašīnas : köl : tudun : inisi : altun : tamyan : tarqan : yayız yerimkä :
 adirıldimiz a : yayız : yerimkä : adirıldimiz : a : äsizim ä :
- W5 oyıl(l)arī : tayyunlarī : kün : üçün laqzın : yïlqa : bardīŋiz : a : yïta : äsiz ä :
 ölügimin : üçün : yoylayī : bertimiz : ä :
- W6 apa : yegän : irkin : toqïtdim : a : yïta
- W7 azyanaz : toqïtdim : a : äsizim ä : yïta : äsizim ä :

(14) 雄山羊タムガの間にも文字が挿入されている。高さ 8~10 cm の文字もあれば、スペースに応じてやや小ぶりの文字だと 5 cm ほどのものもある。

(15) この部分の文字は 8~11 cm とかなり大きい。

(16) やや小ぶりの横書き銘文。

Asgat-IIb : マウンド東方の石槨外碑文, 鹿像のある東面

East side – Verso [図 13]

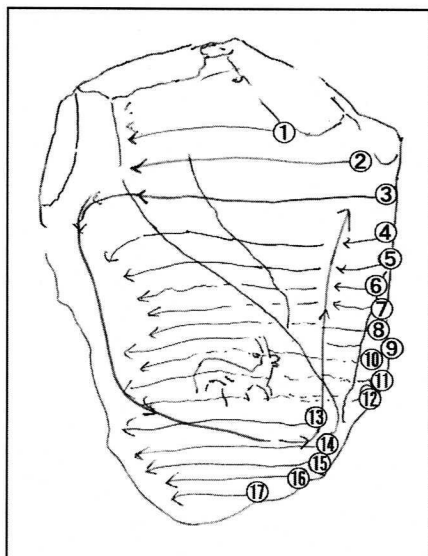


図 13 : 石槨外碑文東面の銘文 (①～⑰)

翻字

E1 (šNš:külTWDN:iNsi:LTWN:TMGN:TRQN:BRDi:)

E2 (ygn:irkn:TWuqiTDm:)⁽¹⁷⁾

E3 üza:tȝri:rklgrmšSRa:YGzyrmza:TuqzYšma:ükünüč
n:DRLDȝz:rnč:ülgmin:üčn:YWGLYW:brtmz⁽¹⁸⁾

E4 Qȝma:(ügma:bükmdmza:Tmabükmdmasz:YT a:Y
Ta:)⁽¹⁹⁾

E5 (szma:bükmdmz:YT a:bükmdmz:YT a:)

(17) やや大きな文字の横書き銘文.

(18) やや大きな文字の横書き銘文.

(19) やや細長い銘文.

- E6 (y r m a : b ü k m d m z : a y r m k a D R L D m z a)
 E7 (b g m a : y g n m a : b ü k m d m z Y T a s z m a)
 E8 (S R a : Y G z y r m k a D R L D m z : a : Y T a : s z m a :)
 E9 (y g n m a : b ü k m d)
 E10 (. . m a : y g n m a : y r m a : Y T a Y T a s z m a)
 E11 (. y r m a : D R L D m z a)
 E12 [. . m a Y T a : y r m k a : D R L D m z]
 E13 [/ / - m a : D R L D m a : s z m a : Y T a]
 E14 š N š : k ü l T W D W N i n s i L T W N
 E15 T m G N : (T R Q N : Y G z y r m)
 E16 (D R L D m z a : D R L D m z)
 E17 (Y T a : s z m a : Y T a)

転写

- E1 ašīnas : kōl tudun : inisi : altun : tamyan : tarqan : bardī :
 E2 yegān : irkin : toqītdīm :
 E3 üzä : täñri : ärklig ärmiš asra : yayız yerimiz ä : toquz yaşıma : kün üçün :
 adrīldīñiz : ärinč : ölügimin : üçün : yoylayu : bertimiz
 E4 qañım a : ögäm ä : bökmädimiz ä : atım a bökmädim ä äsiz : yīta : yīta :
 E5 (äsizim ä : bökmädimiz : yīta : bökmädimiz : yīta :)
 E6 (yerim ä : bökmädimiz : ä yerimkä adrīldīmiz a)
 E7 (bäğim ä : yegānim ä : bökmädimiz yīta äsizim ä)
 E8 (asra : yayız yerimkä adrīldīmiz : a : yīta : äsizim ä :)
 E9 (yegānim ä : bökmädi[miz : ä])
 E10 (/ - m a : yegānim ä : yerim ä : yīta yīta äsizim ä)
 E11 (/ / / / / / / yerim ä : adrīldīmiz a)
 E12 (/ / - m a yīta : yerimkä : adrīldīmiz)

E13 (/ / -m a adırıldım a : äsizim ä : yïta)

E14 ašinas : köl tudun inisi altun

E15 tamyan : (tarqan : yayız yerim)

E16 (adırıldımız a : adırıldımız)

E17 (yïta : äsizim ä : yïta)

(2) 和訳

Asgat-Ia : (東面－正面)

E1 アシュナス (家) のキョル・トゥドンの弟, アルトゥ [ン・タムガン・タ] ルカンよ! 褐色の我が地に我らは別れた (亡くなった), ああ!

E2 アズガナズが画像を描いたという.

E3 褐色の我が地に我らは別れた (死んだ), ああ!

E4 上方には我がテングリ (=天神) に, 下方には褐色の我が地に我らは別れた, ああ! 我が父よ, ああ! 我らは満足しなかった, 我が母よ, ああ! 我らは満足しなかった, ああ!

E5 我がテングリに, 我らは別れた, ああ! 褐色の我が地に我らは別れた, [ああ!]

E6 上方には我らがテングリに, 褐色の我が地に我らは別れた, [ああ!]

E7 下方では褐色の我らの地に我らは別れた.

E8 アパ・イエゲン・イルキンが描いたという.

Asgat-Ib : (西面－裏面)

W1 アシュナス (家) のキョル・トゥドンの弟であるアルトゥン・タムガン・タルカンの葬儀を (我らは) 行うことができなかったのので, 我らは別れた, ああ! 我らは (生き) 残ろう! ああ! 死者は力強くあつ

たという。我らは（生き）残ろう！ああ！日よ、月よ！我らは満足しなかった、ああ、悲しい、ああ！

W2 タルカンの息子たちは名誉のために、豚年に汝らは逝った、ああ！
悲しい、ああ！悲しい、ああ！褐色の我が地に、別れるたびに私は物思いに沈んだ、ああ！我らは別れて逝った、ああ！上方に我がテングリに、褐色の我が地に我らは別れた、我らは満足しなかった、残念だ！

W3 褐色の我が地に我らは別れた、ああ、悲しい！ああ、悲しい！ああ！
我らの地よ！ああ、我らは別れた、ああ！褐色の我らの地よ、ああ、悲しい、ああ！

W4 褐色の我が地に我らは別れた、ああ、悲しい、ああ、残念だ！

W5, W5', W5'' アパ・イエゲン・イルキンなる私が彫った。我らは満足しなかった、ああ！その弟のアズガナズなる私が彫った、悲しい、ああ！残念だ、悲しい、ああ！残念だ！

Asgat-IIa : (西面－正面)

W1 褐色の我が地に我らは別れた、ああ！下には褐色の我が地に我らは別れた、ああ！

W2 上方にはテングリに、下方には褐色の我が地に我らは別れた、ああ！
我が地に我らは別れた、ああ、残念だ！下方には褐色の我が地に [我らは] 別れ [た、ああ！//////////]

W3 我が地に我らは別れた、ああ！残念だ、悲しい！ああ！

W4 アシュナス（家）のキョル・トゥドンの弟、アルトゥン・タムガン・タルカンよ！褐色の我が地に我らは別れた、ああ！褐色の我が地に我らは別れた、ああ、悲しい、ああ！

W5 彼の息子たちは名誉のために、豚年に汝らは逝った、ああ、残念だ、

悲しい！ああ！我が死者のために、葬儀を我らは挙げてやったのだ、
ああ！

W6 アパ・イエゲン・イルキンなる私が彫った、ああ！残念だ！

W7 アズガナズなる私が彫った、ああ！悲しい、ああ！残念だ、悲しい、
ああ！

Asgat-IIb : (東面－裏面)

E1 アシユナス（家）のキョル・トゥドンの弟、アルトゥン・タムガン・
タルカンが逝った。

E2 イエゲン・イルキンなる私が彫った。

E3 上方にはテングリは力強くあったという。下方には褐色の我らの
地よ、ああ！私が9歳のときに名誉のために汝らは別れていった、
確かに、我が死者のために、我らは葬儀を挙げてやった。

E4 我が父よ、ああ！我が母よ、ああ！我らは満足しなかった、ああ！
我が従兄弟（もしくは叔父）よ、ああ！私は満足しなかった、ああ、
悲しい！残念だ、残念だ！

E5 悲しい、ああ！我らは満足しなかった。悲しい！我々は満足しなかった。
悲しい！

E6 我が地よ、ああ！我らは満足しなかった、ああ！我が地に我らは別
れた、ああ！

E7 我がベグよ、ああ！我が甥よ、ああ！我らは満足しなかった。残念だ！
悲しい、ああ！

E8 下には褐色の我が地に、我らは別れた、ああ、残念だ、悲しい！ああ！

E9 我が甥よ、ああ！我らは満足しな（かった、ああ！）

E10 我が//よ、ああ！我が甥よ、ああ！我が地よ、ああ！残念だ、残念だ、
悲しい、ああ！

- E11 // 我が地よ、ああ！我らは別れた、ああ！
E12 我が Ⅲ よ、ああ！悲しい！我が地に我らは別れた。
E13 我が Ⅲ よ、ああ！我は別れた、ああ、悲しい！ああ、残念だ！
E14 アシュナス（家）のキョル・トゥドン¹の弟、アルトゥン・
E15 タムガン・タルカン²よ！褐色の我が地よ！
E16 我らは別れた、ああ！我らは別れた。
E17 残念だ、悲しい、ああ、残念だ！

8. 訳注

Asgat-Ia

E1, ašinas : この冒頭箇所をラドロフは、ヤドリンツェフの原拓から ¥Ƨš (t k š) と判読して、修正拓でそのように復元し、これを tākāš と転写して古代テュルク人の名前の一部とみなした。以来、この読みが定説とされ、様々な箇所でも引用されてきた。しかしながら我々の拓本では当該箇所は ¥Ƨ¥ (š N š) と明瞭に刻まれている [図 14]⁽²⁰⁾。この語は、Asgat-Ib, W1 & Asgat-IIa, W4 & Asgat-IIb, E1 の 3 箇所にもその残画が確認できる。なお、本箇所では最初の両舌音 š の下にアレフの様なストロークが延びているが、これは本銘文の別の行である E8 の冒頭部の p 字の逆字にあたるものであり問題にはならない。このルーン文字の形からは šanaš, ašnaš の他に、šaniš, ašaniš, さらに šinaš, ašinaš などが再建されるものの、いずれも従来の碑文からは存証されないものであるばかりか、意味も不明である。しかしこの綴りは本稿の第 9 節に述べるように ašinas と転写するのが適当で、筆者は漢文史料で言う突厥王家が出自する「阿史那」氏に相当すると考える。

(20) Cf. 大澤 2008, pp. 36-39. なお本碑文の旧報告（大澤 2008）を発表した後の 2009 年 8 月にモンゴル国立大学教授の Ts. バットルガに会った際、彼もこの字句は § N § と翻字すべきで、ラドロフのように tk § とは読めないことに気づいていたことを話してくれたが、それが何を指しているかは不明ということであった。



図 14:画像銘文の拓本写真から見た銘文(E1とE8)の一部(2007年筆者撮影)

E1, köl tudun inisi : 意味は「キョル・トゥドンの弟」である。ラドロフは、直前の語を人名テケシと読み、これをその述部と見なして「テケシは、キョル・トゥドンの弟（である）」と訳出している。しかし前注で記したように、「テケシ」は「アシュナス」に訂正すべきである。また後注で述べるように、我々の拓本からは「キョル・トゥドンの弟」に相当する人物名がフルネームで綴られており、冒頭の語をキョル・トゥドンの弟の名前と見なすことはできないのである。なお、本碑文にみられる köl tudun の冒頭の k 字は本箇所では子音一文字の 𐰍 (k) 字で綴られているが、この板石の背面部の銘文では 𐰏 (ük) の二音文字記号で綴られている。この特徴は、本遺跡の石槨外碑文の西面で k と綴られている一方、東面では ük と綴られていることと軌を一にする。そして後述するように、本遺跡の銘文はすべてイエゲン・イルキンなる人物が彫っていたことが銘記されていることからすれば、彼にとってはその子音を示す際には、単一子音の 𐰍 (k) でも 2 音字音の 𐰏 (ük) でもどちらでも良かった

ことを意味する。なお、この人名を küI ではなく köI と再建すべき点については CTD, p. 137 の記載に依拠して、大方の学者の受け入れるところとなっている (Hamilton 1962, p. 52, n. 10; 護 1967, p. 429, n. 9; Bazin 1994; Sertkaya 1995, pp. 129-133)。

次に tudun についてであるが、この称号は突厥第二可汗国期に関する『旧唐書』、『新唐書』、『通典』の各突厥伝では「吐屯」と記され、⁽²¹⁾可汗の側近から各地の集団に派遣されて専ら徴税を司るほか、当地での監察もかねた官職である (護 1967, pp. 43, 367)。また「吐屯」は突厥第一可汗国期の『周書』巻 50・異域伝下・突厥の条では「吐屯發 *t'uo-d'wən-piwet」(Karlgren 1972, pp. 36, 118, 86) の表記で記されており、突厥第一可汗国の草創期の西暦 555 年に建造された麴氏高昌国時代の麴斌造寺碑でも 6 代目の麴宝茂 (在位 555-560) が通常、突厥配下の部族長や国主が帯びる「希利發 *xjei-lji-piwet」(Karlgren 1972, pp. 146, 141, 86) [= iltäbär], その子の乾固が「鋤屯發 *t'əu-d'wən-piwet」(Karlgren 1972, pp. 53, 118, 86) の称号を帯びているのが確認される (池田 1985, p. 110)。

ではこの称号の使用は突厥時代に限られるかと言えば、さらにそれ以前の柔然末期の^{あなかい}阿那瓌時代の記事にも異体字の「吐頭發 *t'uo-d'əu-piwet」(Karlgren 1972, pp. 36, 51, 86) の形で確認される。例えば、『魏書』巻 58 には「阿那瓌はその従祖の吐頭發を遣りて精騎一万を率いて、南のかた、救援に出だしむ」(楊番伝付楊津伝, p. 1298) とある。これは柔然可汗の阿那瓌の従祖 (父の従兄弟) が帯びた官称号であったことが知られる。またこの官称号は「(阿那瓌) その吐頭發郁久闐汗拔姫臣等を遣りて女を晋陽に送らしむ」(『北史』巻 98・蠕蠕伝, p. 3265) という記事にも見える。同書のこの前には阿那瓌が東魏に臣属することを決めて、東魏に朝貢させて自分の息子の菴羅辰のために東魏から「公主」を娶るべく、「吐頭發」をしばしば派遣させていたことが記されており、上述の文中における「女」とは中国から降下した公主を指している。この「吐頭發」

(21) 『旧唐書』巻 194 上・突厥伝上, p. 5153; 『新唐書』巻 215 上・突厥伝上, p. 6028; 『通典』巻 197・北狄 4・突厥伝, p. 5402。

はその送り迎えを担当した者であり、阿那瓌に従う官僚と考えられ、この官称号が可汗、可賀敦、俟利發等と同じく柔然期にも存したことが知られるとともに（松田 1970, p. 225, 註(4)）、その職務を考える上で参考となる。

今、本ホル・アスガト碑文における「キョル・トゥドン」は本碑文の主人公「アルトゥン・タムガン・タルカン」の兄であり、「アパ・イエゲン・イルキン」も、「アルトゥン・タムガン・タルカン」の次世代の親族、おそらくは息子の一人と目されることから、この「トゥドン」と「イルキン」は突厥の可汗本家に代々伝えられてきた官称号と見なせることは注目に値する。これまで護雅夫などにより、前者が各地に派遣された徴税や監察を司る役人、後者が突厥部族に従属する弱小部族長に付与された官称号であることが明らかにされてきてはいるが（護 1967, pp. 398-438）、本碑文での使用例は従来の研究では取り扱われなかった突厥の阿史那氏族中の官称号である。既に後者の突厥部内部でのイルキン号については最近、鈴木宏節がチヨイル碑文に見られる「イルキン」を再検討し、これが傍系の阿史那氏族の中に存在した可能性を指摘すると共に、別の事例——イルテリッシュ可汗の祖先とビルゲ可汗時代の一人のテギンがともに「イルキン」を帯びていたこと——を指摘する（鈴木 2009, pp. 13-16）。何より注目すべきは、突厥第二可汗国の創業者イルテリッシュ可汗の直系の正統王族が帯びる雄山羊タムガをもつ被葬者の身内に「トゥドン」と「イルキン」を帯びるものがいたという点であり、イルテリッシュの祖先以来の伝統的な称号を本碑文の主人公の親族たちが継承している点にある。これまで「吐屯」や「吐屯發」の官称号については、『周書』巻 50・異域伝下・突厥の条、『隋書』巻 84・突厥伝や『通典』巻 197・北狄 4・突厥上などが、突厥可汗国内の高官が帯びる称号として記載してはいたが、これまでの用例からは阿史那王族に属するかどうかは不明な者ばかりであることからすれば、本事例は突厥王族の中にもそうした称号をもつ者がいたことを証するものである。ここでの「トゥドン」は他部族に派遣された徴税官という役職としてよりは、むしろ監察官などの任務をおびた可汗に従う官僚の一人とみなせよう。

E1, altun : tamyan : tarqan : 本箇所は「キョル・トゥドンの弟」の字句に連なる箇所に該当する。これまで全く無視されて来た箇所であるが、我々の拓本からは幾つかの文字の残画が認められる。まず, altu[n : tamyan : ta]rq[an] の読みは、本画像碑文西面や石櫛外碑文の西面及び東面にも、「アシュナス家のキョル・トゥドンの弟」という字句に引き続いてはっきりと刻まれていることから支持される。「タムガン・タルカン」も古代テュルク時代の称号である。その役職内容は不明であるが、本来は氏族や部族毎に家畜に刻印され、後に氏・部族の表象として使用された「tamya タムガ」という語を伴うことからみて、可汗国にあって（金の）印璽を行使するような行政官僚とみることは可能であろう。例えば、オング碑文の西面第4行目には、阿史那王族出身であるエルテミッシュ・ヤブグの息子としてイシュバラ・タムガン・チョル、その弟のビルゲ・イシュバラ・タムガン・タルカンの名が挙げられ、阿史那一族に属しており、かつ当時の可汗に奉仕すべきことが綴られている状況から見ても、可汗の身边にいて可汗を支える国家官僚と見なすことができよう（小野川 1950, p. 442）。となればこの役職は突厥可汗の側近として文書行政に携わっていた行政官僚の一役職名と推定される。

E1, yayız yerimkä : adırıldımiz : a : : tarqan の後に, 𐰽𐰺𐰍 (Y G z) の字句が読みとれる。本銘文では, yayız yerimkä adırıldımiz a 「褐色のわが土地に、我らは別れた (i.e. 死んだ), ああ！」という文句が頻用されており、ここもそのひとつと見なすことができよう。これは、故人（たち）自らが「我」もしくは「我ら」といった一人称の人称語尾を伴う形で、自らが生まれ、そこで活動し、また自らの信仰の対象でもあった「褐色の大地」との別れを惜しむ表現である。この表現は「墓碑銘」として知られるイエニセイ碑文にも知られる。例えば、ウユック・トゥラン碑文 (No. 3 / 以下, No. の後の数字は, Васильев 1983, pp. 9, 11 に示されたイエニセイ碑文の通し番号を示す) の4行目には, üç yätmiş yaşımqa adırıldım ägük qatun yerimkä adırıldım ... 「私は63歳のときに、私は別れた。エギユック・カトゥン（河川名）よ！我が土地に私は別れた ///」(cf. Кормушин 1997, pp. 192-193), ペグレ碑文 (No. 11) の5行目

には、yerim ä yïta subum a adïrïldïm a buğa äsïzim ä yïta 「我が土地よ、ああ！残念だ！我が水よ、ああ！私は別れた、ああ！痛ましい、悲しい、ああ！残念だ！」(cf. Кормушин 1997, pp. 272-274), 第一バイブルン碑文 (No. 42) の7行目には、äsiz yerim ïduq yerim äsiz ä äsiz älim qanıñ küñ ay äsiz ä ana inäl säñgün yerim 「悲しい、我が土地よ！聖なる我が土地よ！悲しい、ああ！悲しい。わが国よ！我がカンよ！日月よ、悲しい、ああ！母よ、イネル、セングンよ、我が土地よ！////////」(cf. Кормушин 1997, pp. 167-168) などの字句中に刻まれている。なお「～と別れる」という動詞 adïrïl- の直前の名詞は与格 -kä/-qa でも、位奪格の -tä/-ta でも可能であり、後者の例はイエニセイ碑文でも普通に見られる (No. 6, 7, 8, 12, 27, 32)。例えば、この形は先のウユック・トゥラン碑文の引用文に見える ägük qatun yerimkä adïrïltïm といった表現やチャホル第五碑文2行目の uyar bägimkä adïrïltïm uyar qadaşımqa adïrïltïm 「有能な我がベグに、私は別れた、有能な我が一族に、私は別れた」という表現の中で明瞭に記されている (Малов 1952, pp. 12-13; 護 1967, p. 144, n. 14; Tekin 2003, pp. 111, 162-164)。また本碑文では、死者との悲しみを表す際に、yïta 「残念だ」、a (ä) 「ああ」といった感嘆詞が多用されていることと併せて、本碑文がイエニセイ碑文と共通する墓碑銘的性格を多分にもつものであることが了解される。

E2, bädizin : bädzämiş : ラドロフによって r G R b d s m š と翻字され、är ayïr bädismiş (戦士を重厚に描いたという) と転写・訳出されて以来、定説としてこれまで踏襲されてきた。しかし ED や DTS などの古代トルコ語辞典には「描く、飾る、装飾する」を意味する動詞として bädzä- や「装飾」を意味する名詞の bädiz が見出し語として掲げられているにもかかわらず、bädis- 形は採用されていない。それは他の諸碑文でこの形が在証されないからであろう。案の定、我々の拓本からは r G R の文字の代わりに、b d z n の文字がしっかりと彫られ、また b d s m š の代わりに b d z m š の文字がはつきりと確認できる。なお、2000年8月に同遺跡をボルドと調査したハンガリーのドプロビッチは本箇所を、彼らが採拓した部分拓本の写真をもとに解読作業

を行い、この箇所を先の人名とあわせて、*azyanaz är [ayır] bädizmiş* と転写し、「それ（この遺跡）はアズガナズ・エルによって彫られた」（Dobrovits 2007, p. 152）と受身形に訳出している。結果的に同氏の読みはラドロフの読みの域を出ずオリジナリティーはないが、これまで *bädismiş* と読まれてきた単語中の *s* を *z* と読み直した点は評価できよう。因みにこの形は DTS, p. 90a には見出し語としてあげられており、またテキンも当初、その訳注では動詞のひとつとして *bädiz-* の形を認めて “*süslemek*” の訳語を当てていたが（Tekin 1988, p. 125）、最近での文法書では *bädzä-* を動詞語幹と見なしている（Tekin 2003, pp. 73, 240）。その背景に、既にクローソンがその辞書で「飾る；描く」を意味する動詞語幹として、*bädiz-* の形は認めておらず、*bädzä-* という形を見出しに掲げていることと関係があらう。クローソンはその上で、本箇所もラドロフの様な形には転写せず、*bädzämiş* 「飾ったという」という読みを提唱する（ED, p. 310a）。本稿ではこうした議論を踏まえて、動詞語幹として *bädiz-* の形ではなく、*bädzä-* 「飾る」を採用しておく。なお、ここで動詞 *bädzä-* は対格語尾を支配する動詞であることはオルホン碑文の例からも知られている。例えば、ビルゲ・カガン碑文南東面の行では対格語尾としての *-ig* を伴う *bädizig bädzä-* 「絵を飾る；絵を描く」という形で示されてはいるが、対格 *-in* を伴う *bädiz-in* の形もキョル・テギン碑文の北東面にもみられ、キュリ・チョル碑文東面 13 行目でも *bädizin bädzätti* と刻まれており（林・大澤 1999, pp. 152, 156-157）、何ら問題はない。

E3, *yayız : yerimkä : adirildimiz : a* : 従来の読みでは全く検出されなかったもので、今回、我々の拓本から微かにではあるが、残画が確認されたので訳出した。おそらくは先のアルトゥン・タムガン・タルカン（たち）が死んだことを伝える表現であらう。

E4, *üzä : tägrimkä : asra : yayız : yerimkä : adirildimiz : a : qağım : a : bökmädimiz : ögäm ä : bökmädimiz : a* : ここは向かって左側の人物の右脇にそって刻まれていることからみて、この字句そのものは、左側の人物の死に対して捧げられた字句と見なせよう。

E5, tāṅrimkā : adīrīldīmiz : a : yayiz yerimkā : adīrīldīmiz : a : この字句も従来の読みからは無視されてきた箇所である。石そのものからは何か彫られた形跡が窺える程度にすぎなかったが、凸凹の激しい拓本に斜めから光を照射することで、文字の輪郭が浮かび上がった。この文字は中央の人物と左側の人物との間にあり、かつ先の字句が左側の人物に捧げられたものであるならば、中央の人物の死に対して捧げられた字句と解せよう。

E6, üzä : tāṅrimizkā : yayiz : yerimkā : adīrīldīmiz : a : この字句が中央の人物とその右側の人物との間に刻まれていること、また、後述するように右端の人物には彼に対する字句が別に刻まれていることから勘案して、これまた中央の人物の死に対して捧げられたものであろう。

E7, asra : yayiz : yerimizkā : adīrīldīmiz : 文字自体が右側の人物の右側内部に沿って刻まれているという配置からみて、これは右側の人物の死に対して捧げられた字句であろう。

E8, apa : yegän : irkin : bädzämiš : これまで冒頭の p a の文字は無視されてきた。なお本箇所の p 字は通常の形とは異なり左右逆向きであり、次の a 字も薄く彫られている。次の y g n i r k n の文字のなかで g は k と読まれ、yüknür kün 「礼拝日 (に)」と転写・訳出され、現在でもその読みは多くの研究者間で支持されてきている。しかしこの転写を行うには、この文字群の冒頭部なり、第2音節の間に、円唇前舌が挿入されている必要があるのに、そのような文字はラドロフの原拓にも修正拓にも、見いだすことはできない。また我々の拓本からも検出できない。それ故、該当句は既にバザンが指摘しているように、人名もしくは称号要素としての yegän と転写すべきである (Bazin 1991, p. 166)。この解釈は本箇所の冒頭字句の apa が人名要素もしくは称号であることと符合する。またこの apa yegän irkin なる字句は石櫛外碑文西面からも、碑文を刻んだ人物名として記されている。因みに本称号の apa を除く「イエゲン・イルキン」という称号は突厥第二可汗国期に作成されたルーン文字資料中には、1928 年頃にその存在が東ゴビ・アイマクで確認され、現在のモンゴル民族博物館に保管されているチョイル碑文にも「//ン・

イエゲン・イルキン」)として確認される (Sertkaya 1998, pp. 353, 357-358; 鈴木 2009, p. 7). しかしこの人物は、これを紹介解説したクリヤシュトルヌイやセルトカヤによれば、突厥勃興期のウイグル部の族長やトグズ・オグズ勢力に関係する人名として解釈されていることに加え、冒頭の称号要素「アパ」と「//ン」が同じではないこととあわせて、同一人物であるとは思われない。ともあれ、ここは「アパ・イエゲン・イルキンが彫った(飾った)という」と訳出することができる。勿論、この文面からでは文字部分を彼が彫ったのかどうかは判然としないが、ただ文字しか彫られていない画像碑文の刻銘者としても「アパ・イエゲン・イルキンが彫った」と記されていることからみて、画像銘文も彼が彫った蓋然性は高いと言えよう。こうした刻銘状況から判断して、彼は阿史那一族に属する本遺跡の被葬者アルトゥン・タムガン・タルカンに近い血筋に属し、また彼は銘文を刻むことのできる教養人であつたと言えよう。

Asgat-Ib

W1, qalalim: この中の L 字の 2 つ目の文字について、ラドロフはその修正拓で s と示している。ラドロフはここから s と m の文字が逆に彫られたとみて、ここを「残った所の」を意味する分詞形 qalmiš と読んだ上で、次の k 字に i 字を補い、これに続くものとしてラドロフ修正拓の上から 2 行目の段に続くと考え、その最初の文字を oyl(larī) と転写して、これを「生き残った所の 2 人の息子」という意味に解した。この文字の判読や解釈にはオルクン、マローフ、ボルドやドubroビッチも従っている (Orkun 1938, p. 122; Малов 1959, p. 45; Болд 2006, pp. 88-89, 93; Dovrovits 2007, p. 150). しかし我々の拓本からは、L 字の 2 つ目は L 字の下端からやや小ぶりの左上に曲がった箇所を確認できる。実は「アトラス」の原拓本のうち、ラドロフの修正拓の原拓本である「アトラス」所収のヤドリツェフ拓でもクレメンツ拓でも、本文字には縦棒の中間あたりから小さな突起が見えている。それ故、ここは全く離れた 2 行目の冒頭字に続く形容詞と見たいがために L 字と s 字が逆に刻

まれたとみなす必然性は全くない。後述するように、文字が終わっている
と見なされてきた後続箇所には摩滅してはいるものの、更に文字は彫られ
ている。

W1, a : kün : ay bökmädimiz ä : äsizim ä : ラドロフの原拓本では、a k と
見える。先述したように彼はこの後に、i 字を補って、ek[i] とみたのであるが、
我々の拓本からは更に文字は刻まれている。イエニセイ碑文などの墓碑銘で
は死者を追悼する表現として、「日」や「月」の字句がしばしば使用される (No.
8, 10, 12, 44, 92, 147, 149)。ここも被葬者との別れを惜しむ表現と見なせる。

W2, tayyunları : 我々の拓本のみならず、クレメンツ拓本からも残画が確認
できる。この読みは本遺跡の碑文前面 (Asgat-IIa, W5) からも確認される。

W2, kün üçün : ラドロフは y l g k と翻字して yälgäk (イエルゲッキ) と読み、
息子の 1 人の名前と解して以来、今日まで通説とされてきた。しかし冒頭の
文字はラドロフ原拓でも我々の拓本でも **ᠠᠭ** (k ü) と判読できるのであり、定
説は受け入れがたい。この後には前舌音 **ᠨ** (n) が読めることからすれば、「息
子たちが〜の故に豚年に (逝った)」という文脈に照らして、kū-n üçün 「名
誉のために」と解したい。周知の如く üçün は対格語尾をとることがあるので、
このように解することには問題はなからう。実はこれと同じ表現が本遺跡の
石槨外碑文の西面 (Asgat-IIa, W5) にも確認できる。

W2, laqzın yılqa : ラドロフ拓本では L Q z の文字は確認できるが、N は確
認できない。当初、ラドロフは alqazın と転写し、訳出してはいなかった (ATIM,
p. 257)。その後、オルクン、マローフでは改められて laqzın yıl 「豚年に」と
転写された (Orkun 1938, p. 122; Малов 1959, p. 45)。それ以後、この読みが
受け継がれてきた。我々の拓本からは N の文字は確実に確認でき、y L Q a
の文字もわずかに認められる。同字句は Asgat-IIa, W5 にも確認できる。なお、
この「豚年」は、後述するように、西暦 723 年に相当すると考えられる。

W2, äsizim : ラドロフはここを siz : ととり、「汝らは逝った、汝らは」と
解している。この解釈はオルクン、マローフ、ボルドやドブロピッチでも同
様である。因みにラドロフ原拓では m の次の句読点の後に 1 字の様な字形が

確認できる。ラドロフの活字転写では後続部に何かが続いている様を表示すべく、点線で示されている。オルクンのみはラドロフ拓に依拠して、L字を転写しているものの、翻訳箇所では当該箇所は無視されている (Orkun 1938, p. 122)。我々の拓本からは a : siz のあとにやや縦の位置で m 字が確認できる。それ故、ここは従来の 2 人称の人称語尾と見なす解釈よりは、感動詞の *äsizim* ととるべきであろう。周知の如く、墓碑銘では種々様々な感動詞が知られ、特にテキン (Tekin 1964) によるそれまでの 2 人称代名詞などを感動詞とみなすべき提案がなされてより以来、碑文の解釈に導入され、今日では研究者に広く受け入れられている (Tekin 2003, pp. 164-165; Erdal 2004, pp. 351-355)。かつて ↓ (a) はオルホン碑文などにおける句読点 : の機能を代行すると解釈されていたが、これも「ああ！」を意味する感動詞であることは今では周知の事実である。ボルドやドブロピッチなど現代の研究者が未だに古い解釈をとるのはいささか理解に苦しむ。こうした死者の無念の思いを伝える a をはじめとする *äsiz*, *yita* などの感動詞を語末におく形式は墓碑銘に特徴的である。

W2, *adīrlīmīšča* : -mišča の箇所はラドロフの拓本の修正拓ではそのように示され、彼は *adīrlīmīšča* と転写して「別れた時に」と訳出している。我々の拓本では -*miš* の最後の *š* の文字はむしろ *č* に特有の下部が 2 つに枝分かれしているような形をしている。それゆえか、オルクンはラドロフの転写に依拠しつつ、「あたかも別れてしまうかのように」と -*mišča* の本来の副詞句を形成する機能を持たせて訳出している (Orkun 1938, p. 314)。またマローフは *adīrlīmīšda* と -*miš* の後の文字をととは翻字せずに d と見なして、「別れた時に」と訳出している (Малов 1959, p. 45)。さらにボルドはここを *Д R L m č č* と転写した上で *adīrlīm čača saqīnur adīrlī* と転写し、「別れよう。チャチャは思った、別れてから」と訳出しているが (Болд 2006, pp. 88-89)、ここに m 字が入る余地などないし、本碑文では *čača* なる人物はどこにも記されておらず、また文脈から期待される読みとは言いがたい。またドブロピッチはここを *adrīlmisčā saqīnur ārtim adrīl[mađim?]* と転写し、-*mišča* をオルクンのように「あたかも別れるかのように思ったが、

別れ（なかった？）」と次の文とも合わせて訳出している（Dovrovits 2007, pp. 152-153）。なおリンチェンのスケッチでも、問題の -mīšča の š 字は縦棒で示され、これが s であることを示している（Rinchen 1968, pp. 41-42）。またセル・オドジャブのスケッチではあたかも W 字のように記されているが、その下部は枝分かれした形ではないことは明らかで、これをとと読むことは難しい（Сэр-Оджав 2003, p. 243）。こうした点からみて、我々の拓本でも -mīš の š 字は下端の先が小さく逆の Y 字のように二股に分かれて見えるが、これは s / š 音を示す縦棒のみをとるべきで、左から斜め下に出た突起は誤って彫られたとみなせよう。結果的には、当初のラドロフの翻字が妥当といえる。ただ問題はこの意味をどう考えるかにあるが、ここでの -mīšča の用法は難解である。これまで突厥第二可汗国期やウイグル可汗国期の碑文では -mīšča の用法は見られず、動詞語幹に連なる -ča の用例がビルゲ・カガン碑文で見られるのみである（ビルゲ・カガン碑文南面 9 行目）。即ち, uluγ oγlum ayrıp yok bolča kuy sānūnūy balbal tikā birtim 「私の長子が亡くなった時に、私は郭將軍をバルバルとして立ててやった」という文における bol-ča がそれで、ここは通常「～したときに」と時を示す副動詞として訳出される（Tekin 2003, p. 178）。一方、-mīšča の用法は西ウイグル時代のウイグル語文献にも確認され、通常、この表現は「比較の程度や頻度を示す用法」として知られ、「あたかも～であるかのように」と訳される。この原則に従えば、本箇所はオルクンやドブロピッチの如く「あたかも別れたかのように、私は想った」と訳出することは可能である。しかしこの文の直前では、書き手の親族たちは既に死んでしまったことが記されており、文脈上、不適當である。むしろ筆者は -mīšča を「～すればするほど、ますます～となる」という意味で使用したウイグル語文献での例文（Erdal 2004, pp. 468-469）に依拠して「別れる（i.e. 死ぬ）たびに、私は物思いに沈んだ」という意味に解しておく。

W2, adīrīlu : bardīmiz : a : ラドロフ拓本でも我々の拓本でもこの末尾の字句は W と読める。ラドロフはその前に p 字が彫り忘れられたとみて、ここに p 字を補い、adīrīlipan と副動詞の形とみた。しかしこれならば、何がし

かの行為がその後に記されるべきであるのに、何も補っては記していない。一方、オルクンは最後 W 字を無視して、「離れよ！」と命令形に訳しているが、これまた直前にある「考える；物思いに沈む」という表現とはそぐわない。実は、我々の拓本では、後続部が極めて薄く確認できる。後舌音の ʒ (B) が隅に確認できることから、ここには *bardīmīz* が彫られていたと推定しておきたい。

Asgat-IIa

W6, *apa : yegän : irkin : toqïdīm : a : yïta* : 本銘文部がアパ・イエゲン・イルキンによって彫られたことを示している。なお、次行には、アズガナズもこの碑文を彫ったことが記されていることからみて、このアパ・イエゲン・イルキンを補佐して、彫ったのであろう。

Asgat-IIb

E1, *ašīnas : köl tudun inisi : altun : tamyan : tarqan : bardī* : 本箇所文字および第 2 行目の文字は、本石櫛外碑文のほかの箇所の文字が 7~11 cm の寸法であるのに比して、3~4 cm と小さい。この理由ははっきりとはわからないが、その第一の理由はこれを刻む段階で板石には文字を刻むスペースがなかったことが考えられる。とすれば、これは最後の段階か、時期をはずれて書き足された箇所ということは言えるであろう。現時点で筆者は、この箇所やその他の小さな文字で薄く刻まれた箇所は、中央の「上方にはテングリは力強くあったという」という文面から始まる箇所に連なり、しかも大きな太字で刻まれた文章が真っ先に刻まれたと見るのが至当であり、ここに見られる繰り返しの文面は、そのあとに刻まれた飾り文とでも言うべき性格のものと考えている。なお、ルーン文字碑文の中で「(この世から) 別れる」を意味する表現として、*adīrīl-* のほかに、*-a bar- / -u bar-* のような「~してしまった」といういわば完了の補助動詞としての機能をもつ *bar-* 以外の、本動詞 *bar-* (行く；去る) が「(この世を) 去る」という意味で使われる。その例と

して、墓碑銘としてのエレゲスト第一碑文 (No. 10) 6 行目やチョイル碑文 4 行目などがある (cf. Кормушин 1997, pp. 236-237; 鈴木 2009, p. 7). こころとした用例のひとつと見なせよう.

E2, yegän : irkin : toqıtdım : ここには画像碑文 Asgat-Ia, E8 や Asgat-Ib, W5 における apa yegän irkin なる人物を指すとみられる. 本銘文の書き手が, 彼であることを示している.

E3, asra : yayız yerimiz ä : toquz yaşıma : kün üçün : adrıldıgız : ärinç : ここでは, 「私が 9 歳のときに, 名誉のために」と ärinç 「確かに」の箇所は今回, 新たに判読できた. かなりしっかりした彫りである. これまで当該箇所はラドロフ以来, 逆の方向から činär bädizmiş 「チネルが書いた」として読まれてきたが, 全くの誤りである. 問題はここでいう「私」が誰か, ということになるが, 筆者はこの碑文を書いた (アパ・) イェゲン・イルキンその人と考える.

E3, ölügimin : üçün : yoılayu : bertimiz : 冒頭の ölügim に接続する対格語尾 -in が今回は読みとれた. これはこの後に来る語, üçün 「のために」の語に係る形である. また yoılayu の 2 番目の文字 W についてはラドロフ以来, ここには彫られていないと見なされて, yıılayu- と表記され, 本来期待される「葬儀」を示す名詞に動詞形成接辞がついた yoı-la- という形の異形と見なしてきているが, 改正すべきであろう.

E4, qağım a : ögäm ä : bökmädimiz ä : atım a : bökmädim ä äsiz : yıta : ラドロフの拓本でも Q ɳ m a の文字は読みとれるが, 彼は Q m š と翻字し, qamış と転写して, 先の E3 に接続する箇所として示している. しかしここでは筆者が示した「我が父よ, ああ!」の形ではつきりと刻まれており, 疑問の余地はない. その後の箇所はこれまで全く判読されぬまま放置されてきており, 文字は E3 の下から上に進行する行を挟んで, E3 の上から下における部分あたりまで刻まれている [図 13]. 確かに我々の拓本でもそこから文字の明確な字形を読みとることはたいへん困難であるが, 日光に照らしてよく見ると確かに文字の痕跡が認められる. ここではなお, 試みとして翻字作業結果を提示するが, 更なる検証を必要とする. なお, 以下の行では, この

行と同じく、E3の下から上に進む行を挟んで、右から左に進行する行が9行ほど、鹿の図像の足下付近まで、ぎっしりと刻まれている。

E16, adırıldımız a : adırıldımız：実はここまでの箇所は本遺跡の画像碑文の冒頭部（E1）とほぼ同文である。そして本箇所が本碑文全体の末尾に相当することからすれば、本碑文の主人公がアルトゥン・タムガン・タルカンなる人物であることを伝えている。

9. 碑銘の歴史学的検討

（1）墓廟・碑銘の作成年と主人公の立場

主人公たちの没年については、「タルカンの息子たちは名誉のために、豚年に汝らは逝った、ああ！」（Asgat-Ib, W2）と記されているのが手がかりになる。古代テュルク諸族間で使用された十二支獣紀年の中で「豚年」は、突厥第二可汗国の中で碑文が建てられたことが知られる8世紀前半にこれを想定することが許されるのであれば、西暦の711, 723, 735年に該当させることができる。ただこれはあくまでも「息子達」の死亡年であり、彼らの父の死亡年と見なすのは難しい。というのも「別れるたびに私は物思いに沈んだ」（Asgat-Ib, W2）という表現からは、彼らが一度に亡くなったというよりは、まず父親が亡くなり、その後で息子たちが亡くなった情景を彷彿とさせる。

因みにこの「豚年」をめぐって、バザンは書体の特徴から、711年とするにはやや早すぎるとし、また735年とするには本碑文の使用された文字が古風であることを指摘する。例えば、ホショー・ツアイダム碑文のそれと比べると、前舌音のgの文字形が通常の形よりも、その内部に2つの線をもつこと、また動詞接辞の-mışのş文字がホショー・ツアイダム碑文ではsで示されていたのに対して、ここではsと示されていて、オング碑文中の文字と似通っている点から、ホショー・ツアイダム碑文よりはその文字使いが古形に属するという（Bazin 1991, p. 166）。彼はここから723年に死亡したとみて、

翌 724 年に葬儀は行われたと結論づけた。⁽²²⁾ 筆者自身はルーン文字の形については、年代を考察する上では確かにひとつの目安にはなるものの、刻銘者が同一者ではない上、その文字使いや書き癖などの「個性」もあり、それだけでは不十分であると考えている。そうした特徴以外の面から、筆者は今回本碑文の 2 箇所には碑文の成立事情を伝える新たな字句を読むことができたので、以下ではその字句に注目して考えてみたい。

まず、本銘文には、「私が 9 歳のときに名誉のために汝らは別れていった、確かに、我が死者のために、我らは葬儀を挙げてやった」(Asgat-IIb, E3) という一節がある。この文章で使用された *adīrīldīñiz* の *-ñiz* という 2 人称複数の人称語尾をそのまま、複数の死んだ者たちと解するのであれば、「葬儀を挙げてやった」人物とは、本銘文の中で「私」という 1 人称単数で「(この碑文を) 私が彫った」と記すアパ・イエゲン・イルキンとその弟のアズガナズのどちらかとなるが、下記に述べるように葬儀を挙行するためには、公式の地位や身分をもつ人物であることが必要であり、こうした条件を想定するならば、アズガナズという名前だけしか記されていない弟よりも、その官称号で名前が示された兄のアパ・イエゲン・イルキンの方こそがふさわしい。そして上の文からは、もう一つ、死者たちが亡くなった時には、この書き手は当時「9 歳」であったことがわかる。

では、9 歳の時に死者たちの葬儀をすぐに挙げることができたのか、ということそれは難しいであろう。なんとすれば、近親者たちは「アルトゥン・タムガン・タルカンの葬儀を（我らは）行うことができなかったので、我らは別れた（死別した）」(Asgat-Ib, W1) ことも碑銘中で表明している。つまり、当時の習慣として葬儀を挙行するには、それに相応しい年齢と地位や身分を必要としていたと考えられる。

(22) セルトカヤも 1985 年のトルコ歴史学会でモンゴリアの突厥時代のルーン文字碑文の分類表を発表した際、ラドロフの読みに依拠して「テケシ、キョル・トゥドンの弟、アルトゥン・タムガン・タルカン」を主人公と見なし、主人公はバザン説に依拠して 723 年に死亡し、翌 724 年に本遺跡が立てられたと見ている (Sertkaya 1995, p. 319)。

では、葬儀を挙行できる年齢とは何歳頃と考えられるのか？

当時の古代テュルク語銘文などからは、男が一人前と見なされるひとつの目安として、幼名から成人名 (är at) を得る年齢をあげることができる。その際には、イフ・ホショート碑文では主人公のキュリ・ Chol が 7 歳の時に雄山羊を殺し、9 歳のときに牙をもつ猪などの大きな獲物を狩猟で射止めたことなど、自身の勇猛果敢さを讃える字句が見られ、成人するにはこうした通過儀礼を経て成人名を得て一人前の戦士となった経緯が窺える (大澤・林 1999, p. 152)。例えばホショー・ツアイダム碑文では、突厥第二可汗国初代のイルテリッシュ・カガンが亡くなった後に、その息子であった黙棘連 (後のビルゲ・カガン) がタルドゥシュ・シャド職に任命されたのは 14 歳もしくは 15 歳であったし (岩佐 1936, p. 183), その弟キョル・テギンについても *umay tæg : ögüm : qatun : qutïña : inim : köl tigin : är at bultï* 「ウマイのような我が母カトゥンの靈威のために、わが弟キョル・テギンは成人名を見つけた」 (キョル・テギン碑文東面 31 行目) という文面があり、その直後に「彼が 16 歳のとき」父が組織した法や掟を獲得した、という文面が続いていることからすれば、彼は 15 歳でキョル・テギンなる「成人名を得た」ことになる。⁽²³⁾ テギンは通常、可汗の子弟が帯びる公式の称号であり、彼は生まれた時からキョル・テギンの名前ではなかった。当時の遊牧テュルク諸族間では、数え 15 歳以上で成人名や部族内で正式称号を得ることができた (Bazin 1991, pp. 107-108)。これと同様のことは、モンゴリアの北方で今日のロシア連邦トゥヴァやハカス共和国地域のイェニセイ河上・中流域の草原を版図に収めていた古代クルグズ (キルギズ) 国に奉仕した戦士の碑文のひとつであるベグレ碑文⁽²⁴⁾ (No. 11) 1 行目には、*tör apa ičräki bän tör apa ičräki bän bäs yägirmi yašda*

(23) 引用文中の最後の *bultï* の転写についてトムセンは *boltï* と転写しているが、ここはテギンの解釈を是とみて採用した (Thomsen 1896, p. 108; Tekin 1988, pp. 79-80, n. 87)。

(24) 本碑文については 2004 年 8 月に筆者がハカス共和国のミヌシンスク市郷土博物館で本碑文を実施調査した経緯があり、その解読調査結果に依拠している (大澤 2005, pp. 76-78)。

alınmıšım qunčuyım a buğa adırıldım a äsizim ä kün ä azdım a 「私はテル・アパ・イチレキである。15歳の時に自分に娶られた我が妻よ！悲しい！私は（彼女から）別れた、ああ！悲しい！ああ！日よ！ああ！私は迷った、ああ！」とあることから、彼が15歳で結婚をしたこと、さらに同じ碑文の第3行では、beš yägirmi yašımında tabyač qanya bardım a är ärdämim üçün alpun altun kümüšig ägiritäbä kiši qazyandım a 「私が15歳の時に私はタブガチ・カン（中国皇帝）（の国）⁽²⁵⁾へ行った。ああ！我が戦士なる勇敢さの故に、勇気ある（故に）、金、銀、駱駝、娘を獲得したのだ、ああ！」と、主人公が15歳の若さでクルグズ国の戦士もしくは使者として中国に赴むき、そこで金、銀、駱駝、娘を獲得したことを自らの功績として回想していることからわかるように、クルグズ族でも突厥と同様に15歳を男子の元服年齢と見なしていたことがわかる。

こうした状況を考慮すれば、本碑文の主人公であるアルトゥン・タムガン・タルカンの息子たちが死亡した「豚年に」「9歳であつた」少年が親族の葬儀を挙行して、その墓廟を作ってそこに彼らの画像や銘文を作ることができるようになるのは、彼がアパ・イエゲン・イルキンという成人名を得てからのことであろう。となると、彼らが死んだ723年もしくは735年から6年以上を経る必要があつた。前者ならば729年、後者ならば、741年頃ということになる。ただ後者であれば、ウイグル可汗国第二代目の磨延啜（葛勒可汗）のために立てられたタリят碑文では，säkiz otuz yašıma yılan yılqa türük elin anta bulıyadım anta artatdım 「私が28歳の時に，蛇の年（741年）に，突厥の国を，そこで私は攪乱した，そこで私は（その国を）崩壊させた」（タリят碑文東面5行目）と記されているように，西暦741年には突厥はウイグル軍の磨延啜（および拔悉蜜・葛邏祿）などの軍により攪乱されて，国が崩壊するに至る（片山1999, pp. 169, 172）。こうした混乱期の中で本墓廟や碑文が建造されたなどとはまず考えにくい。となれば，本碑文の主人公のアルトゥン・タムガン・

(25) この碑文の作成時期がいつごろかは不明であるが，もしこれが西暦9～10世紀頃であれば，ここで言う「タブガチ・カン」とは「唐皇帝」を指そう。

タルカンの息子たちは西暦 723 年に死亡したものの、実際に墓廟・碑文が建造されたのは少なくとも 6 年後の 729 年ごろが相応しいと筆者は考える。

また本遺跡の存在する場所という点から見るならば、その地はオテュケン⁽²⁶⁾山東方域の突厥の牙庭から約 53 km 北北東に山ひとつ離れた極めて近接した場所にあることが注目される（本稿末の付図 B を参照）。それに加え、銘文からは本碑文の主人公たち一族が阿史那王族に属し、かつイルテリッシュ可汗直系の阿史那家に特有の雄山羊タムガをもつことから、彼らがその家系に属していたことが分かる。さらに、トゥドン、タムガン・タルカン、アパ・イエゲン・イルキンなどの突厥高官が帯びる称号を与えられていたことを考慮に入れば、彼らが時のビルゲ・カガンやキョル・テギンとは親縁関係にあったことが推測される。また彼らの死が 723 年ごろであるという説が正しいのであれば、彼らは生前にはビルゲ・カガンの治世下で、トゥドン、タルカン、イルキンなどの官称号を与えられ、ビルゲ・カガンの本拠地たるホショー・ツアイダム草原の牙庭をウイグルなどの敵軍からの侵略に備えて防衛すべく、本遺跡を含む草原地帯を所領として与えられていたとみなせよう。

（2）アシュナス Ašinas の語をめぐって

本ホル・アスガト碑文では計 5 箇所（Asgat-Ia, E1; Asgat-Ib, W1; Asgat-IIa, W4; Asgat-IIb, E1, E14）で ašinas と転写できる語が刻まれている。ただこれまでこの語は、如何なる古代テュルク・ルーン文字碑文からも在証されていない。

ではこの ašinas は何を指すのか。筆者はこの語が被葬者の出自する家系やその系譜を示す箇所の冒頭部に記されている点に鑑みて、後続のキョル・トゥドンなる人物が属する氏族、もしくは部族の名称と見なして、これを突厥王族の出身氏族たる「阿史那 *ā-ši-nā」（Karlgren 1972, pp. 15, 257, 100）の原音とみたい。

(26) オテュケン山 (ötükän yış) は今日のモンゴル国の北西から南東に延びるハンガイ山脈を指す（付図 A・B を参照）。突厥およびウイグルの可汗はこれを聖山と崇拝し、その東方のオルホン河流域の地に代々の牙庭をおき、オテュケンの地 (ötükän yer) と称した（護 1967, pp. 24-28）。

本碑文の *ašinas köl tudun* という配列は、*ašinas* + 官称号の *köl tudun* となっているが、実はこれとよく似た表記は漢文史料からも指摘することができる。例えば、突厥第二可汗国期の史料の中で、開元十三（725）年十月十一日、唐の玄宗皇帝と「通訳」を通じて言葉を交えた突厥の使節の一人の名前が「阿史那^{ママ}徳吉利發（阿史那頡利發の誤り、中古音では **ʾā-ši-nā yiet-lji-piwei*⁽²⁷⁾ の誤記；cf. 護 1967, p. 469, n. 25）」と記されている（『唐会要』巻 27・行幸，p. 606）。彼の名前は *ašina iltäbär*（阿史那のイルテベル）という原語に復元できる。今、この人物名の語構成を見ると、当人の出自氏族名を姓に、そしてそのあとに彼が本国で帯びていた官称号を名前とみて、姓 + 名という配列になっている。また開元十一（723）年七月戊辰の条には、「突厥大首領阿史那瑟鉢達干等三十二人来朝するに、瑟鉢達干に大将を授け、其の属には並には郎将を授けて、蕃に放還す（『冊府元龜』巻 974・外臣部・褒異第二，p. 3875）という唐への入朝記事があり、その使節の長官として突厥大首領の阿史那瑟鉢達干（中古音では **ʾā-ši-nā šiet-puat-d'ât-kân*⁽²⁸⁾）の名が挙げられているが、これは阿史那 + *išbara tarqan*（イシュバラ・タルカン）と復元できる。こうした2つの事例から窺えるように、漢籍で突厥人の名前を挙げる場合に、姓「阿史那」+ 名「官称号」の順で書き記す方式がとられているが、本碑文における *ašinas köl tudun* の語配列もこれに対応している。こうした点から見ても本碑文における *ašinas* と転写される語は、漢籍史料における対応例と音の類似性から見て、末尾の *s* を除くと、本人物が出自する氏族、即ち突厥の「阿史那」を指す可能性は高い。なお *š N š* とルーン文字で綴られる *ašinas* の第2母音について、後舌系の広母音 *a* の後には、後舌系の狭母音 *i* を補うことが可能であることはキョル・テギン碑文東面17行目及びビルゲ・カガン碑文東面15行目に刻まれた *Y š L* を *yašil* と狭母音 *i* で補うことができることから可能である。また語末の *š* 字を *s* と転写できる点については、タリят碑文西面6~7行目及びシネウス碑文南面2行目の *išbaras* 「イシュバラたち」の綴

(27) Karlgren 1972, pp. 112, 141, 86.

(28) Karlgren 1972, pp. 116, 275, 86, 62.

りの中では第1音節のśも第3音節のsも共にśの文字で刻まれているものの、転写の際にはそれぞれśとsで転写できることからみても、何ら支障はない。⁽²⁹⁾

では aśinas の表記は他の碑文や文献から在証されないのであろうか？

周知のごとく、1997年の日本・モンゴル合同調査の報告には、西暦6世紀末頃に突厥可汗のために作成されたソグド文字ソグド語からなるブグト碑文の吉田・森安の新解釈成果が収められている。そこには、漢文史料中の「阿史那」の語に対応する表現として ''śy-n's が綴られ、aśinas と転写されている(吉田・森安 1999, p. 123)。そしてまたカラバルガスン碑文のソグド文面にも ''śy-n's が在証され、それが同じ碑文の漢文面における「阿史那」に対応する表現と見なされており(森安・吉田 1998, p. 155)⁽³⁰⁾、上記の人名要素に対する

(29) タリアト碑文当該文字の翻字や転写などは(片山 1999, p. 170)を、シネウス碑文での当該文字については(森安・鈴木ほか 2009, p. 16)を参照した。

(30) ブグト碑文とカラバルガスン碑文のこの語について、最近ベックウイズはいずれも碑文での本箇所が不鮮明であることに加え、リフシツ、吉田ともに複数形の語尾を持つ形で「テュルク人」を指すと見た tr'wkt の形がその他のソグド文奴隷売買文書、ムグ山文書、カラバルガスン碑文、マフルナーマグでのソグド語表記 twrk と単数形で記されていることから、本箇所の字句の読みは疑問であり、それ故、この箇所と文脈の上で密接な関係のある ''śy-n's の読みも不鮮明であり、支持できぬことを述べ、ブグト碑文第1行全体は再考されるべきと主張している(Beckwith 2005, pp. 14-16)。しかし本碑文を最初に解読したクリヤシュトルヌイとリフシツによれば、こうした表記上の差異はソグド語ではよく見られる現象であることを他の例を挙げて説明し、tr'wkt という表記が twrk の一異形であり、コータン語 ttrrūkā, tturki, チベット語 drug / dru-gu の表記に由来する可能性を述べる。特にコータン語 ttrrūkā には複数形形成接辞 -ā が付属することから、ソグド語の複数形を反映するものか、チベット語に依拠する可能性を示唆している(Kljaštornyj & Livšic 1972, pp. 85, 87-88)。その後、クリヤシュトルヌイは比較的最近の論著で、ソグド表記の türkūt は türk にソグド語の複数形接辞 -ūt が付属した形で、これが漢語の突厥に音写されたこと、また türk の表記もソグド語経由で先のサンスクリット語やチベット語、コータン語やビザンツ史料における各種の「テュルク」を指す表記に伝播していったという考えに傾いている(Кляшторный & Сурганов 2000, p. 77)。筆者は、リフシツらが主張するように、ソグド語 tr'wk の形が twrk の異形とみる見解が可能であるならば、古代テュルク・ルーン文字碑文上にもそうした異形は何らかの形で反映されていると考える。例えば、トニュクク碑文では通常の türk と転写できる形と türük と転写できる形が知られている。私見ではこの前者の表記がブグト碑文以外のソグド語文献や中世ペルシア語文献での turk / twrk と表記され

筆者の見解を裏付けるものとなっているのが了解されよう。

また既にシャバンヌが指摘していたように、ašinās の語はヤクービーなどのアラビア語史料において、西暦 834 年の事件に関連してアッバース王朝の第八代カリフであるムウタシム（在位 833~842）によって購入されたトルコ人の奴隷軍人「アトラーク」の中にみられるトルコ人武将の人名としても現れ、漢語の「阿史那」との関連性が提起されている（Chavannes 1903, pp. 20-22, n. 2; 清水 1990, p. 5）。先のブグト碑文における吉田の新たな読みは、シャバンヌ説を裏付ける語形として注目すべきものではあったが、これまでは突厥人自身の立てた古代テュルク・ルーン文字碑文からその形が全く在証されなかったこともあって、トルコ人自身がこれをどのように表記していたかについて長らく、謎とされてきたのであった。ロシアのクリヤシュトルヌイはこの問題を逆手に取って、古代テュルク・ルーン文字で漢語の「阿史那」に対応する語が見いだされないのは、これが別の語で示されているからだとして、トルコ語史料で「蒼きテュルク (kök Türuk)」の表現こそは、「阿史那 (王族) と

るものに、後者の異形がブグト碑文に見られる tr'wkt に対応する可能性があると考え。逆にいえばルーン文字の中の「テュルク」を表す二つの形の存在は、ルーン文字で書き表される以前の「テュルク」を指すソグド語形での表記上での差異 (twrk と tr'wkt) が存在したことを示唆するものとも言えよう。こうした点から、筆者はブグト碑文での tr'wkt も twrk と同義であると考え。それ故、筆者はベックウイズの主張には賛同しがたい。なお漢語の「突厥 *t'uət-kiwet」(Karlgren 1972, pp. 134, 91) の原語については、これまでマルカルトやペリオが示唆した柔然経由のモンゴル語の複数接辞 -t のついた türküt を反映する形なのか、当初はコノノフがその可能性を示唆したソグド語の複数接辞 -t のついた形と見なすべきか、という議論がある (Pelliot 1915, pp. 687-688; Кононов 1980, p. 147; Golden 1992, pp. 116-117, nn. 5, 9)。この他に、「突厥」の中古音 *t'uət-kiwet から türk という単数形を想定するブーリーブランク、またこれを鉄勒の中古音 *t'iet-lək (Karlgren 1972, pp. 321, 244) と共に türk とみなす羽田亨、護雅夫らの所論もあり (Pulleyblank 1965; 羽田 1975, pp. 377-378, n. 1; 護 1976, pp. 13-15)、さらにベックウイズが *twrkwač 'ruler of Turkic people' とする新説を提起しており (Beckwith 2005, pp. 14-16)、俄かには断じがたい。ただ現時点で筆者自身は、突厥第一可汗国の公用語のひとつがソグド語であったという言語状況を踏まえるならば、テュルク族間で türk / türük と発音されていたものが公用語ソグド語 twrk / tr'wk に複数形接辞 -t を伴う trüküt / türküt と表記され、この語が漢人史官によって「突厥」*t'uət-kiwet と漢字表記されたと推考しており、ベックウイズの語源説には与しない。

突厥(族の貴顕)」に対応するというアイデアのもと、通常は「蒼い」を意味する kök が、この場合、「阿史那」のトルコ語への意識であるとみなして、これをコータン語の「青い」を意味する āṣṣeina やトカラ語の āšna、さらにはソグド語の 'xs'yn'k などと関連するものとみた (Klyashtorny 1998, pp. 445-447)⁽³¹⁾。しかし既に吉田・森安が指摘しているように、彼の説は先のブグト碑文の語形との不一致からも支持できないし、本銘文での問題の字句の出現によって彼の立論の前提そのものが成り立ち得ないことから完全に否定される。

一方、ベックウイズは「阿史那」をビザンツ史料 *Menandri Protectoris Fragmenta* 中で <As for Aršilas, it is a name for the most monarch of the Turks> (Blockley 1985, pp. 172-173) と記された Aršilas に当たると見て、この語源を *Aršilan/Arsilan 「獅子」と見なすべきとの説を提起している (Beckwith 1987, pp. 206-208)。しかし、この語形も漢語名称とは音韻面で大きな隔たりがあることは吉田・森安論文でも指摘されており、またゴールデンもそのような連関性は不可能だと述べている (Golden 1992, p. 121)。筆者としてはなお今後の検討を要するとはいえ、このビザンツ史料にいう aršilas も ašinas からの派生形と見なしえるのではないかと考えている。

ところで、そのゴールデン自身は最近のハザル可汗国の王権の聖性を扱った論文の中で、ブグト碑文における ašinas の形よりは、ašina の形こそがユーラシア草原では頻用されたと述べると共に、その語源として先のクリヤシュトルヌイ説を引き合いにして、イラントカラ語説を支持している。また彼はハザルの出自を伝えるイスラーム諸史料における ānsa (Hudūd al-ʿālam, Minorsky 1970, pp. 161-162), šaba (Ibn Xurdādhbih 1889, p. 40), šāna,

(31) なお、kök Tūrük の kök については、通常は「空、蒼い」と訳出されるものの (ED, pp. 708-709)、色彩の示す方位という観点から「東方の」を意味すると見たサイナー説 (Sinor 1982, p. 155) のほかに、'clan, tribe' と解釈できる可能性を説くデズジャン説 (Tezcan 1991, p. 373) などがあり、議論されている。筆者自身は中世ペルシア語文献中に Spēt Xyōn 「白いフン」 Karmir Xyōn 「赤いフン」などの用例 (Bailey 1931-1932, pp. 945-946) に見られるように、一定の部族のイメージを鮮明にすべく阿史那王家とその血族や姻族などから構成された最も基層をなす社会的集団——テュルク氏族——に付された色彩語彙のひとつではないかと考えている。

šāya (Al-Mas'ūdi 1966 I, p. 155) の形を ašina の転訛した形と見なしている (Golden 2007, pp. 165, 172, n. 33)⁽³²⁾。しかし本銘文での在証例により、むしろ筆者は突厥可汗国期におけるトルコ人の間ではトルコ語 ašinas の形が一貫して頻用されていたと考える。なお漢語の「阿史那」はその語源をトルコ語と見なすか、それとも借用語なのかという点でも意見が分かれている。⁽³³⁾ 6世紀中葉の突厥第一可汗国の成立に伴い、可汗の側近や外交官として活躍していたソグド人の使用した当時の公用語ソグド語音の ašinas を漢字で表記する際に何らかの理由で最後の s 音が脱落した形で伝わったか、もしくは史官がこの外国姓を三文字で表記することを意図してわざと語末の s 音を省略した可能性も考えられる。その後この漢語表記「阿史那」は、「阿那 a-na」、「阿史 a-ši」、「史 ši」等と簡称されたりもした。例えば「賢力毗伽公主阿那氏墓誌」(羽田 1958, pp. 365-384)、「阿史特勒僕羅」(『冊府元龜』卷 999・外臣部・請求・開元六年の条, p. 4040) や「大唐安西阿史夫人壁記」などの例(石見・森安 1998, p. 96)、更には「阿史那懷道」を「史懷道」(『旧唐書』卷 194 下・突厥伝下, p. 5192) と記す例などが挙げられるが、これらの表記は歴代の北朝・隋唐時代の宮廷史官の間で踏襲されてきたのであろう。⁽³⁴⁾

(32) なおこれに先立ってゴールデンは、ハザルを扱った著書において Hudūd al-'ālam の注釈をしたミノルスキーの指摘に従い、ānsa はハザル可汗の聖性を示す išan の転化したもので ašina とはみなせないとも記す。田村健もこの問題はイスラーム文献での記載例から追認できるという (Golden 1980, pp. 219-221; 田村 2006, p. 57, n. 6)。但し本文でも述べた如く、ゴールデンはなおも他の状況証拠からハザル王が阿史那氏に出自するとの考えをとっている。なお、この点については田村氏からご教示を得た。感謝申し上げます。

(33) 例えば、P. A. ブードベルグがその語源を「越える」を意味するテュルク語の ašī- とする説については 護 1967, pp. 279, n. 4, 574 を参照。ただこの説は語源がトルコ語であることを前提に、彼らの祖先が自分たちの首領を選ぶ際に、樹木に向かって最も高く「跳躍」した最年少の息子がこの名を得たという族祖伝承(『周書』卷 50・異域伝下・突厥の条, p. 909) を結びつけたものであるが、真偽は不明である。

(34) 周知の如く「阿史那」の初出は「突厥は蓋し匈奴の別種、阿史那氏を姓とす。別に部落を為す」(『周書』卷 50・異域伝下・突厥の条, p. 907) という記述である。林寶撰『元和姓纂』卷 5, pp. 573-574 の記載によれば、突厥第一可汗国の處羅可汗や蘇尼失部が帰化した際に彼らは「阿史那」と号し、開元頃に「史」と改称したと記されている。

また当時のソグド語やイスラーム諸史料での *ašīnas* の形に関して言えば、中世アラビア語年代記、例えばタバリーではこの語は *ašnās* も *ašinās* もどちらの表記も確認される。⁽³⁵⁾ その中で特筆すべきは、*ašinās* について「in Persian (ペルシア語で)」という注記が見られることである (Bosworth 1987, p. 68, n. 217)。筆者はここから、この語ははじめペルシア語で *ašinās* と表記されていたものが、アラビア語年代記に取り込まれる過程で両表記が並存し、さらに後のアラビア語年代記では、*š* と *n* の間の母音 *i* が脱落した形で *ašnās* と書き表されたと考える。つまりタバリー中のペルシア語表記とされた *ašinās* の形こそがソグド語碑文や本碑文の古代テュルク語表記に見られる表記をより近い形で伝えるものと見なし⁽³⁶⁾たい。

(3) 3人の男性レリーフ像の比定

画像碑文の中央の男性が口ひげを生やして描かれているのに対して、両側の人物には口ひげの表現を認めることは難しい。それ故、年若い人であることは明らかである。通常、死者を象った石人は右手で容器をつかみ、左手でベルトの剣の柄などを握ったり、ベルトあたりに手を添えたりして、胡座をかいた姿で描かれる。ここの3人の画像もまさにそうした姿で表されている。因みにオルホン碑文、イフ・ホショート碑文（東面12行目）やイフ・ハヌイ・ノール銘文では、古代トルコ語 *bādiz* 「画像」が使用され、それは墓廟の被葬者たる「石人」を指している⁽³⁷⁾と見なされている（林・大澤 1999, pp. 152-154, 156; 大澤 1999b, p. 137）。本画像碑文でも、向かって左隅に *Azyanaz bādizin*

(35) *ašnās* の表記は、Kracmer 1989, pp. xi, xii, 5, 21; Bosworth 1991, pp. XV, 12, 98-100, 102-104, 107-109, 111-112, 122, 124-128, 132-133, 178-179, 183, 201, 214 で確認できる。一方、*ašinās* の表記は、Bosworth 1987, pp. 68, 186 を参照。

(36) 本来、突厥の可汗王族の姓であった *Ašīnas* がアッバース朝政権下で *Gulām* や *Mamlūk* として奉仕するトルコ軍人名の一要素となった現象を、イスラーム国家の奴隷制度という側面のみならず、中央ユーラシアの遊牧国家間における擬似的血縁関係に基づく主従関係という側面を加えて、そのイスラーム世界への展開過程を歴史的に解明しようとした研究としては De La Vaissière 2007, pp. 199-200 を挙げることができる。

bädzāmiš「アズガナズが画像を描いたという」(Asgat-Ia, E2)と記していることからみて、この bädiz「画像」が画面中の3人の男性レリーフ像を指すことはいうまでもない。つまりこの3人は本遺跡の被葬者にあたる。既に、銘文内容から本遺跡の主人公が突厥王族のアシュナス家のキョル・トゥドンの弟である「アルトゥン・タムガン・タルカン」とその息子であろうことには一点の疑いもない。本画像で言えば、中央の人物が父であり、その両脇の二人はその息子の兄弟であることは明らかである。

既にこうした画像の比定は、1952年に南シベリアの古代テュルク時代の石人を報告したエヴィティホワによってなされていた。彼女は石人の意義を考察する比較資料として、本男性レリーフ画像の主人公が座像として描かれたことの意味、さらには服飾、帽子や石槨下部に刻まれた突厥時代特有のハート型模様などの検討を通して、この画像が本遺跡の被葬者であることを指摘した(Евтюхова 1952, pp. 104, 109, 115-117)。それ以来、本画像は古代テュルク時代の石人を考察する際には必ず取り上げられてきたのである。

就中、この被葬者説を強力に推進して来た考古学者 L. R. キズィラソフは、オルホン碑文での balbal の語義やルーン銘文が刻まれた石人の考察を通してその石人の意義を論じる際に、本遺跡の銘文内容と本画像を結びつけて、石人を『周書』巻50・異域伝下・突厥の条や『隋書』巻84・突厥伝でいう「(墓前に)生前の戦闘で被葬者が殺傷した敵の数と同数だけ建てられる立石」およびオルホン碑文などで可汗や王侯の墓に敵将の名前を付して建てられるバルバル(balbal)石とは区別さるべきとする自説を補強する根拠として取り上げている(Кызласов 1964, p. 34; Кызласов 1966)⁽³⁷⁾。その意味では文献学者のクリャシュトルヌイも同様の見解に立っており、本画像の3人を「王侯とその2人の息子」と解釈している(Кляшторный 1978, p. 249)。また、ノブゴロドワもかつてのラドロフの読みに従い、3人の男性レリーフ像の中央の人物がアルトゥン・タムガン・タルカンでその両側の2名はトルグルとイェルゲツキと

(37) このことは我々が2008年8月の調査で今まで未発見とされてきたバルバル石をマウンドの東方で6個見つけ、そこには画像らしいものは何もなかったという考古学的根拠からも支持されよう。

見なしている (Nowgorodowa 1980, p. 144). この見方はロシアのヴォイトフやモンゴルのセル・オドジャブやバヤルなどにも受け継がれている。

筆者自身、上記の研究者たちの見方には基本的に賛成なのではあるが、人物名という点では本稿で既述した如く、両脇の2人の人物は画像碑文西面で記されたように「アルトゥン・タムガン・タルカンの息子たち」にあててべきと考える。

ともあれ、我々は今回の新たな読みを通して、本遺跡上の画像は、『周書』巻50・異域伝下・突厥の条, p. 910 や『隋書』巻84・突厥伝, p. 1864 に記された埋葬習慣において、生前に戦闘で被葬者が殺した敵の人数だけ墓前に立てると記された立石 (balbal 石) ではなく、『隋書』に「⁽³⁸⁾圖畫死者形儀」と記されたものに該当せしめることができる。またここから通常、古代テュルク時代の石囲いの東方に顔を東面に向けて設置された石製人物像 (石人) については、各遺跡の被葬者自身の肖像であるという説を裏付ける確実な証拠を我々は獲得することができたといえる。

(4) ホル・アスガト碑文の性格とその歴史的位置付け

本碑文の画像碑文からは「褐色の我が地に我らは別れた、ああ！」(Asgat-Ia, E1 など)、石槨外碑文からは「我が父よ、ああ！我が母よ、ああ！我らは満足しなかった、ああ！」(Asgat-IIb, E4 など)、また全編にわたって「(私は) 悲しい！」、「残念だ！」、「ああ！」といった死者が自らの死を悼む1人称型の文章に満ち満ちている。しかしながら本碑文では「タルカンの (もしくは彼の) 息子達は名誉のために、豚年に汝らは逝った」(Asgat-Ib, W2; Asgat-IIa, W5), 「私が9歳のときに名誉のために、汝らは別れていった」(Asgat-IIb, E3) といった2人称型の字句も挿入されている。また、これら以外に「死者は力強くあったという」(Asgat-Ib, W1), 「上方にはテングリは力強くあった

(38) スタークもクリヤシュトルヌイの見解を受けて (Кляшторный 1978, p. 249), 本レリーフ画像は普通に見られる丸彫り彫刻の代用であるとの認識を示している (Stark 2009, p. 122).

という」(Asgat-IIb, E3), 「アズガナズが画像を描いたという」(Asgat-Ia, E2), 「アパ・イエゲン・イルキンが描いたという」(Asgat-Ia, E8), 「アシュナス(家)のキョル・トゥドンの弟, アルトゥン・タムガン・タルカンが逝った」(Asgat-IIb, E1) というような3人称型の文章も各面に確認できる。

こうした点からすれば, かつて護雅夫がイエニセイ碑文と突厥碑文について人称型式から分類した碑文の分類方法に依拠すれば, 本碑文は, 死者が自らの死を語る1人称型碑文, 親族や友人らが死者に対してその勇敢さを讃え, 呼びかける2人称型碑文, 更にその死をより客観的に語る3人称型碑文の要素が入り交じったものということになる。護によれば, 古代テュルク系遊牧民に伝統的なシャーマニズム的死生観と密接に関係し, 死者の靈魂を呼び寄せるシャーマンの口を借りて, 死者が親族などの生者に無念の思いを語るのが1人称型碑文, 死者が生者と対話する形を踏まえたものが2人称型碑文ということになる(護 1984, pp. 196-226)。私見ではその儀礼の際に, 死者の靈魂がこの世において宿る場所とみなされるものが, 通常は東に顔を向けた石人ということになる。本遺跡においては, この石人の代わりになるのが, 東西に2つ並んだ石槨のうち, 廟と見なされる東側の石槨内に置かれていた画像碑文の東面(Asgat-Ia, E)に描かれた3人の男性のレリーフ像だったのである。

しかし, 本碑文の性格がこれで解けるのかというと決してそうではない。なんとなれば, 本銘文には死者以外に, 生き残った近親者, 碑銘者などの言葉も, 1人称単数もしくは複数形の形で記されているからである。

Asgat-Ib, W1: 我らは(生き)残ろう!

Asgat-Ib, W2: 褐色の我が地に, 別れるたびに私は物思いに沈んだ, ああ!

Asgat-IIb, E3: 私が9歳のときに名誉のために, 汝らは別れていった, 確かに。

といった字句は, 死者たちの言葉ではなく, 生き残った者たちの言葉として,

1人称で示されているのである。この生き残ったものたちとは、本訳注箇所ですべたように、本碑文の主人公たちのために墓廟や碑文を建造した「アパ・イエゲン・イルキン」と「その弟のアズガナズ」である。こうした碑文の書き手の思いや行為も碑文の中に残されているという点では、キョル・テギン碑文におけるやビルゲ・カガン自身の言葉やルーン文字面の刻銘者たるヨルルグ・テギンの言葉に対比させられる。しかし、全体的に言えば、言い回しは単調である。またその文面もほとんどが死者を悼む文章から成り立つ墓碑銘の性格を多分にもつという点から言えば、本碑文の形式はキョル・テギン碑文やビルゲ・カガン碑文のような「紀功碑文」ではなく、むしろ「墓碑銘」と見なして差し支えない。これまでラドロフ、マローフ以来、その字句が断片的で、様式もプリミティブであり、その彫り方も荒いことから、イエニセイ碑文が時代的にオルホン碑文に先行するものとして扱われてきた（Малов 1952, pp. 7-8）。しかし、これに対して護雅夫はイエニセイ碑文、オルホン碑文の人称型式に注目して、時代的に古いと目されてきたイエニセイ碑文の中に見られる原初的な1人称型式で死者自身が別れを惜しむ語りが、オルホン碑文、とくにビルゲ・カガン碑文中にも確認できることを指摘した上で、オルホン碑文の源流がこうした1人称型の語りを特徴的に持つシャーマンの語りにこそ求められるべきであると提唱した（護 1984, pp. 248, 264-266）。

ただ碑文の成立については文化的により高度な特徴をもつオルホン碑文こそがイエニセイ碑文に先行することを提唱されてはいたものの、当時、碑文型式の面でイエニセイ碑文に特徴的な墓碑銘が突厥の本拠たるモンゴル高原のオルホン河流域の草原地帯に見つかっていなかったこともあり、なお仮説の域を出ていなかった。その後、モンゴリアには墓碑銘の様式を持つ短い岩絵銘文や鹿石を再利用した銘文の存在が報告されてきてはいるが（cf. Баттулга 2005, pp. 114-160）、これらは突厥可汗が本拠としたオルホン地方からは離れた地にあり、また十二支獣などの紀年もない断片的なもので、これらが突厥可汗の阿史那王家の者により刻まれたとは考えに

く、字体的特徴や一部の字句内容からすれば、むしろ後代のウイグル可汗国時代やその北方のイエニセイ碑文と共通するところが多く、その多くは西暦9~12世紀頃に年代付けられると見なされる。ただ唯一、突厥第二可汗国期の阿史那家の傍系に出自する人物に関わる墓碑銘としてはチョイル碑文を挙げることができよう(鈴木2009, pp. 13, 18-19)。しかしこの碑文はホル・アスガト碑文に比べると、オルホン河からの距離も遠く、また行数も少なく、別れの字句内容も限られている。これと同じくイフ・ハヌイ・ノール碑文も8世紀前半の突厥第二可汗国期に特徴的な墓廟施設に附随して「紀功碑文」と想定されるにもかかわらず、死者を悼む墓碑銘が記されている点で貴重な例ではあるが、これが阿史那王族のメンバーを被葬者として築かれたものかどうかは不明である上に、何よりもオルホン碑文の地点からやや離れているという難点がある(大澤1999b, p. 137)。

ところがホル・アスガト碑文は、オテュケン地方の突厥の本拠地に極めて近い上、阿史那王族の成員のために、729年ごろに建造されたこと、そしてその構造もオルホン墓廟に擬せられる遺跡構造をもつことが明らかにされた。この意味では、いわばオルホン碑文に特徴的な「紀功碑文」としての性格をもつことが想定されるにもかかわらず、本碑文内容は生前の事跡を讃えるものではなく、被葬者の死を悼む墓碑銘の色彩に満ち満ちていることが明らかになったのである。こうした点からすれば、本碑文の存在は古代テュルク語碑文の源流をたどる上で、古代テュルク文学の源流と見なされるシャーマンの語りを反映するとされる1人称型の墓碑銘の源流が、イエニセイ碑文ではなく、モンゴル高原の、まさに突厥可汗がその本拠としたオルホン河流域の碑文に存在したということを実証するものである。

今後はここで得られた知見をもとに、現地の研究機関や研究者たちと共同して遺跡調査を継続すると共に、なお不明である古代テュルク・ルーン文字碑文の成立とその発展過程や埋葬・追悼施設の歴史的意義などについても考察を進めて行きたい。

史料典拠一覧

- 『魏書』→北京：中華書局標点本，1974.
『周書』→北京：中華書局標点本，1971.
『北史』→北京：中華書局標点本，1974.
『隋書』→北京：中華書局標点本，1973.
『旧唐書』→北京：中華書局標点本，1975.
『新唐書』→北京：中華書局標点本，1975.
『通典』→北京：中華書局標点本，1988.
『唐会要』→北京：中華書局標点本，1991.
『元和姓纂』→北京：中華書局標点本，1994.
『冊府元龜』→『宋本冊府元龜』北京：中華書局影印本，1989.

略号表

- ATIM = W. W. Radloff, *Die Altürkischen Inschriften der Mongolei*. St. Petersburg, 1. Lieferung 1894; 2. Lieferung 1894; 3. Lieferung 1895; Neue Folge 1897; Zweite Folge 1899.
[Rpt. in 2 vols., Osnabrück 1987]
- アトラス / Atlas = W. W. Radloff, *Атлас древностей Монголии. Труды орхонской экспедиции*. (*Atlas der Alterthümer der Mongolei. Arbeiten der Orchon-Expedition*), 1. Lieferung 1892; 2. Lieferung 1893; 3. Lieferung 1896; 4. Lieferung 1899), Санкт-Петербург.
- AOH = *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Budapest.
- Bichees 2 = Т. Осава, К. Сүзүки, Р. Мөнхтулга, *Бичээс II, 2006 оноос 2008 оны Монгол улс дахь Түргийн бичээс ба эртний дурсгалыг судлах экспедицийн илтгэл*. Улаанбаатар, 2009. = 大澤 孝・鈴木宏節・R. ムンフトルガ『ビチエース II ——モンゴル国現存遺跡・突厥碑文調査報告——』ウランバートル，日本・モンゴル共同調査プロジェクト「ビチエース II」，2009.
- CAJ = *Central Asiatic Journal*.
- CDT = R. Dankoff, J. Kelly (eds.), *Maḥmūd al-Kāṣṣārī, Compendium of the Turkic Dialects*. (*Diwān Luyāt at-Turk*), 3 vols., Harvard University Printing Office, 1982-85.
- DTS = В. М. Наделяев, et al. (eds.), *Древнетюркский словарь*. Ленинград, 1969.
- ED = Clauson 1972.
- 森安・オチル (編)『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』豊中，中央ユーラシア学研究会 = 森安孝夫・A. オチル (編)『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』大阪 (豊中)，大阪大学文学部・中央ユーラシア学研究会，1999.

- Orhun 1995 = D. Vasiliyev *et al.* (eds.), *Orkhon. The Atlas of Historical Works in Mongolia.* (*Orhun. Moğolistan Tarihi Eserleri Atlası*), Ankara.
- TİKA 2003 = Başbakanlık, *Türkiye İktisat Kalkınma Ajansı, Moğolistan'daki Türk Anıtları Projesi 2001 yılı çalışmaları*, Ankara, 2003, pp. 332-335.
- MNTSD = *Монгол Нутаг Дахь Түүх Соёлын Дурсгал*. Улаанбаатар, 1999.
- MSSP = H. Halén (ed.), *Memoria Saecularis Sakari Pälsi. Aufzeichnungen von einer Forschungsreise nach der nördlichen Mongolei im Jahre 1909*. Helsinki, 1982.

文獻目錄

Alyılmaz, C.

2007 *(Kök) Türk Harfli Yazıtların İzinde*. Ankara.

Bailey, H. W.

1931-1932 Iranian Studies, In: *Bulletin of the School of Oriental Studies* VI, pp. 945-955.

1939 Turks in Khotanese texts, In: *Journal of Royal Asiatic Society* 1939-1, pp. 85-91.

Bazin, L.

1991 *Les systèmes chronologiques dans le monde turc ancien*. Budapest.

1994 Kül Tegin ou Köl Tegin, In: M. Nicolas, G. Veinstein (eds), *Les Turcs, des mots, des hommes*. Budapest, pp. 187-192.

Баттулга, Ц.

2005 *Монголын Руни Бичгийн Бага Дурсгалууд*. Улаанбаатар.

Базылхан, Н.

2005 *Қазақстан Тарихы Туралы Түркі Деректемелері II, Көңө Түрік Біміктастары Мен Ескерткіштері*. Алматы.

Beckwith, C. I.

1987 *The Tibetan Empire in Central Asia*. Princeton University Press.

2005 The Chinese names of the Tibetans, Tabghatch, and Turks, In: *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 14, pp. 5-20.

Blockley, R. C.

1985 *The history of Menander The Guardsman*. Liverpool.

Болд, Л.

1990 *БНМАУ-ын нутаг дахь хадны бичээс*. Улаанбаатар.

2006 Хөл Асгатын орхон бичээс, In: *Орхон бичгийн дурсгал II*, Улаанбаатар, pp. 81-98.

Bosworth, C. E.

1987 *The History of al-Ṭabarī, The Reunification of the 'Abbāside Caliphate*, vol. 32, New

York State University press.

- 1991 *The History of al-Tabarī, Storm and Stress along the Northern Frontiers of the 'Abbāside Caliphate*, vol. 33, New York State University press.

Chavannes, Éd.

- 1903 Notes Additionnelles sur Les Tu-Kiue (Turcs) Occidentaux, In: *Documents sur Les Tou-Kiue (Turcs) Occidentaux*. St.-Péterbourg, pp. 1-110. [Rpt., Taipei, 1969]

Clauson, G.

- 1972 *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford.

De La Vaissière, É.

- 2007 *Samarcande et Samara, Élités d'Asie Centrale dans L'empire Abbasside*. Paris.

Dobrovits, M.

- 2007 On the burial complex of Ikhe Askhete: The funeral amongst the Old Turks, In: *Uluslararası Sürekli Altayistik Konferansı Bildirileri 22-27 Haziran 2003*. (Türk Dil Kurumu), Ankara, pp.147-155.

Ercilasun, A. B.

- 1991 *Moğolistan ve Çin günlüğü*. (Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü, Yayınları: 120), Ankara.

Erdal, M.

- 1991 *Old Turkic Word Formation*. 2 vols., Wiesbaden.
2004 *A Grammar of Old Turkic*. (Handbook of Oriental Studies VIII-3), Leiden / Boston.

Евтюхова, Л. А.

- 1952 Каменные изваяния Южной Сибири и Монголии, In: *Материалы и Исследования по Археологии СССР* 24, Москва, pp. 72-120 + 3 pls.

Golden, P. B.

- 1980 *Khazar Studies: An Historico-Philological Inquiry into the Origins of the Khazars*. Budapest.
1992 *An Introduction to the History of the Turkic Peoples*. Wiesbaden.
2007 Irano-Turcica: The Khazar sacral kingship revisited, In: *AOH* 60-2, pp. 161-194.

Hamilton, J.

- 1962 Toquz-Oyuz et On-Uyyur, In: *Journal Asiatique* CCL-1, pp. 23-63.

羽田 亨

- 1975 『羽田博士史学论文集 上巻 歴史論文集』京都, 東洋史研究会.

林 俊雄

- 1996 「モンゴリアの石人」『国立民族学博物館研究報告』21-1, pp. 177-283.
2005 『ユーラシアの石人』(ユーラシア考古学選書) 東京, 雄山閣.

林 俊雄・大澤 孝

- 1999 「イフ=ホショートウ遺蹟とキュリ・ Chol 碑文」森安・オチル（編）『モンゴル現存遺蹟・碑文調査研究報告』豊中，中央ユーラシア学研究会，pp. 148-158.

Ibn Xurdādhbih

- 1889 *Kitāb al-Masālik wa'l- Mamālik*. [Ed. by M. J. De Doeje, Leiden]

池田 温

- 1985 「高昌三碑略考」『三上次男博士喜寿記念論文集 歴史編』東京，平凡社，pp. 102-120.

岩佐精一郎

- 1936 『岩佐精一郎遺稿』和田清（編），東京.

石見清裕・森安孝夫

- 1998 「大唐安西阿史夫人壁記の再読と歴史学的考察」『内陸アジア言語の研究』13，pp. 93-110 + 2 pls.

Karlgren, B.

- 1972 *Grammata Serica Recensa*. Stockholm.

片山章雄

- 1999 「タリят碑文」森安・オチル（編）『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』豊中，中央ユーラシア学研究会，pp. 168-178.

Кляшторный, С. Г.

- 1964 *Древнетюркские Рунические Памятники*. Москва.
- 1971 Руническая надпись из Восточной Гоби, In: *Studia Turcica*. Budapest, pp. 249-258.
- 1978 Храм, изваяние и стела в древнетюркских текстах. (К интерпретации Ихэ-Ханьин-норской надписи), In: *Тюркологический Сборник 1974*, Москва, pp. 238-255.
- 2003 Открытие и изучение древнетюркских эпиграфических памятников Центральной Азии, In: *История Центральной Азии и памятники рунического письма*. Санкт-Петербург, pp. 11-34.

Klyashtorny, S. G.

- 1998 The Royal Clan of the Turks and the Problem of Early Turkic-Iranian Contacts, In: *АОН* 47-3, pp. 445-447.

Klyashtornyj, S. G. & Livšic, V. A.

- 1972 The Sogdian Inscription of Bugut Revised, In: *АОН* 26-1, pp. 69-102.

Кляшторный, С. Г. & Савинов, Д. Г.

- 2005 *Степные Империи Древней Евразии*. Санкт-Петербургского Государственного Университета.

Кляшторный, С. Г. & Сурганов, Т. И.

2000 *Государства и Народы Евразийских Степей*. Санкт-Петербург.

Кормушин, И. В.

1997 *Тюркские Енисейские Эпитафии, Тексты и исследования*. Москва.

Кононов, А. И.

1980 *Грамматика языка Тюркских Рунических Памятников <VII-IX вв.>*. Ленинград.

Крамер, J. L.

1989 *The History of al-Ṭabarī, Incipient Decline*, vol. 34, Newyork State University press.

Кызласов, Л. Р.

1964 О значении древнетюркских каменных изваяний, изображающих людей, In: *Советская Археология* 1964-2, pp. 27-39.

1966 Означении термина балбал древнетюркских надписей, In: *Тюркологический Сборник к шестидесятилетию Андрея Николаевича Кононова*. Москва, pp. 206-208.

Малов, С. Е.

1952 *Енисейская Письменность Тюрков*. Москва-Ленинград.

1959 *Памятники древнетюркской письменности Монголии и Киргизии*. Ленинград.

al-Mas'ūdi

1966-1979 *Murūj ad-Dahab wa Ma'adin al-Jawhar*. [Ed. by Ch. Pellat, Beirut]

松田壽男

1970 『古代天山の歴史地理学的研究 (増補版)』東京, 早稲田大学出版会.

Minorsky, V.

1970 *Hudūd al-'Alam, The Regions of the World*. London, 1937. [Rev. ed., 1970]

護 雅夫

1967 『古代トルコ民族史研究 I』東京, 山川出版社.

1976 『古代遊牧帝国』(中公新書 437) 東京, 中央公論社.

1984 『草原とオアシスの人々』(人間の世界歴史 7) 東京, 三省堂.

森安孝夫・鈴木宏節・齊藤茂雄・田村 健・白 玉冬

2009 「シネウス碑文訳注」『内陸アジア言語の研究』24, pp. 1- 92 + 12 pls.

森安孝夫・吉田 豊

1998 「モンゴル国内突厥ウイグル時代遺蹟・碑文調査簡報」『内陸アジア言語の研究』13, pp. 129-170.

Nowgorodowa, E. (= Новгородова, E.)

1980 *Alte Kunst der Mongolei*. Leipzig.

1981 Памятники изобразительного искусства древнетюркского времени на территории

MHP, In: *Тюркологический Сборник 1977*, Москва, pp. 203-218.

小野川秀美

- 1950 「オンギン碑文譯註」『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』京都，東洋史研究会，pp. 431-451.

Orkun, H. N.

- 1938 *Eski Türk Yazıtları II*, İstanbul. [Rpt. 4 vols. in 1, Ankara, 1987]

大澤 孝

- 1999 「オンギ碑文」森安・オチル（編）『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』豊中，中央ユーラシア学研究会，pp. 129-136.
- 1999a 「古代テュルクのオンギ遺蹟・碑文をめぐる諸問題——モンゴル国内での現地調査を通してみた——」『中東イスラーム文化の諸相と言語研究』箕面，大阪外国語大学，pp. 275-298.
- 1999b 「イフ・ハマイ・ノール遺蹟・碑文」森安・オチル（編）『モンゴル現存遺蹟・碑文調査研究報告』豊中，中央ユーラシア学研究会，pp. 137-140.
- 2005 「イエニセイ・キルギズの信仰文化に関する歴史民俗学的研究」『平成 16 年度三島海雲記念財団研究報告書』42，財団法人三島海雲記念財団，pp. 76-78.
- 2007 「近年におけるビルゲ可汗遺跡の発掘調査と亀石・碑文の方位から見た対唐関係——トルコ・モンゴル合同調査隊による発掘調査簡介——」『史朋』39，pp. 14-38.
- 2008 「モンゴリアのイヘ・アスヘテ（Ikhe-Askhete）画像銘文の文献学的再検討——2006-2007 年夏の日蒙合同調査を通してみた——」『内陸アジア諸言語の解読によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究』（課題番号：17320113，研究代表者 松田孝一）平成 17 年度～19 年度科学研究費補助金（基盤（B））研究成果報告書，大阪国際大学，pp. 21-73.

Ōsawa, T.

- 2008 New research on historical aspects and interpretation of the Ongi site and inscriptions, In: *Chronica 7-8 (2007-2008)*, Institute of History, University of Szeged, pp. 161-177.
- 2009 The cultural relationship between old Turkic kingship and deer image, In: J. Bemmann, H. Parzinger, E. Pohl, D. Tseveendorzh (eds.), *Current Archaeological Research in Mongolia, Papers from the First International Conference on Archaeological Research in Mongolia held in Ulaanbaatar, August 19th-23rd, 2007*. (Bonn Contributions to Asian Archaeology, v.4), Vor- und Frühgeschichtliche Archäologie Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn, pp. 403-418.

Pelliot, P.

1915 L'origine de T'ou-kieu, nom chinois des Turcs, In: *T'oung Pao* XVI, pp. 687-689.

Pulleyblank, E. G.

1965 The Chinese Name for the Turks, In: *JAO* 85, pp. 121-125.

Radloff, W.

1895 *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*. St. Petersburg, 3. Lieferung 1895. [Rpt. in 2 vols., Osnabrück, 1987]

Rintchen, B. (ed.)

1968 *Les dessins pictographiques et les inscriptions sur les rochers et sur les stèles en Mongolie*. (Corpus Scriptorum Mongolorum Instituti Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongolici, Tom. 16, Fasc. 1), Ulaanbaatar.

Сэр-Оджав, О. Ф.

1963 Их Асгатын хөшөөт булш. ШУАМ, УБ, Н1, pp. 91-95.

1970 *Эртний Түрэгүүд (VI-VIII зуун)*. In: SA, Tom. 5, Fasc. 2, Улаанбаатар, pp. 43-46.

1977 *Монголын Эртний Түүх. (Археологийн Найруулал)*, Улаанбаатар.

2003 *Эрдэм Шинжилгээний өгүүлэл, илтгэл, илтгэлийн эмхэтгэл*. Улаанбаатар.

Sertkaya, O. F.

1995 *Göktürk tarihinin meseleleri*. (Türk Kültürü Araştırma Enstitüsü 131-4/40), Ankara.

1998 Die Runen-Inscript von Çoïr, In: J. P. Laut, M. Ölmez, (eds.), *Bahşi Ögdisi Klaus Röhrborn Armağanı*, Freiburg-Istanbul, pp. 349-361.

Sinor, D.

1982 Some Components of the Civilization of the Türks, In: G. Jarring, S. Rosén (eds.), *Altaistic Studies*. (25th PIAC, June, 1982, 12, Stockholm, 1985), pp. 145-159.

Stark, S.

2008 *Die Altürkenzeit in Mittel-und Zentralasien, Archäologische und Historische Studien*. Wiesbaden.

清水和宏

1990 「9世紀アッバース朝のアトラークと奴隸軍人」『史学雑誌』99-6, pp. 1-37.

鈴木宏節

2009 「突厥チョイル碑文再考」『内陸アジア史研究』24, pp. 1-24.

田村 健

2006 「9-10世紀におけるハザルの二重王権——統治者と支配者の関係——」『アラブ・イスラム研究』5, pp. 55-70.

Tekin, T.

1964 On a Misinterpreted Word in the Old Turkic Inscriptions, In: *Ural-Altaische Jahrbücher* 35-8, pp. 134-144.

1988 *Orhun Yazıtları*. (Türk Tarih Kurumu), Ankara.

2003 *Orhon Türkçesi Grameri*. Ankara. [2nd ed.]

Tezcan, S.

1991 Gibt es einen Namen Kōk-Türk wirklich? In: *Türkische Sprachen und Literaturen*. (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica 29), Wiesbaden, pp. 357-375.

Thomsen, V.

1896 *Inscription de L'Orkhon déchiffrées*. (Mémoires de la Société Finno-Ougrienne 5), Helsinki.

ツルテム, N. (監修)

1990 『モンゴル曼荼羅 3 —— 寺院建築 ——』東京, 新人物往来社. [Original ed., Tsultem, N., *Mongolian Sculpture*, Ulan-Bator, 1989]

Васильев, Д. Д.

1983 *Корпус Тюркских Рунических Памятников Бассейна Енисея*. Ленинград.

Войтов, В. Е.

1985 Хроника археологического изучения памятников Хошо-Цаидом в Монголии (1889-1958 гг.), In: *Древние культуры Монголии*, Новосибирск. pp. 114-136.

1986 Археологические исследования Б. Я. Владимирцова и новые открытия в Монголии, In: *Mongolica. Памяти академика Бориса Я. Владимирцова 1884-1931*, Москва, pp. 118-136.

1996 *Древнетюркский пантеон и модель мироздания в культово-поминальных памятниках Монголии VI-VIII вв.*, Москва.

Ядринцев, Н. М.

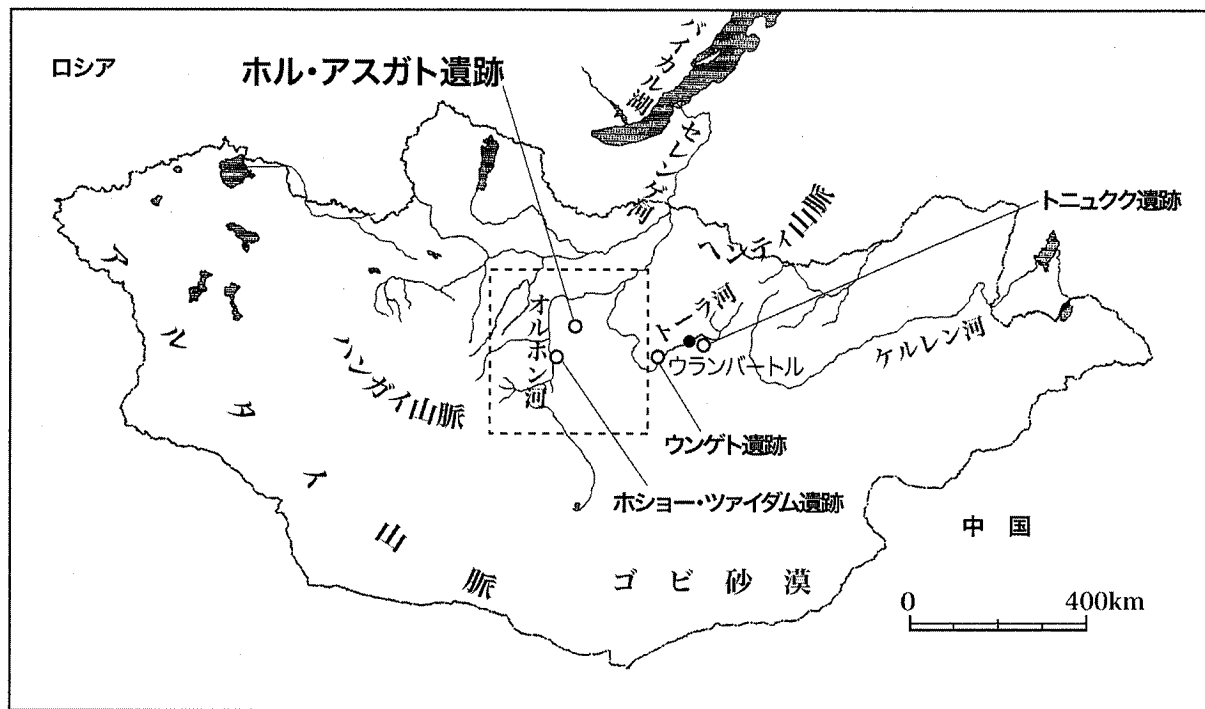
1901 Отчет и дневник о путешествии по Орхону и в южный Хангай в 1891 году, In: *Сборник трудов Орхонской экспедиции V*, Санкт-Петербург, pp. 1-54.

山田信夫

1985 『草原とオアシス』(ビジュアル版 世界の歴史 10) 東京, 講談社.

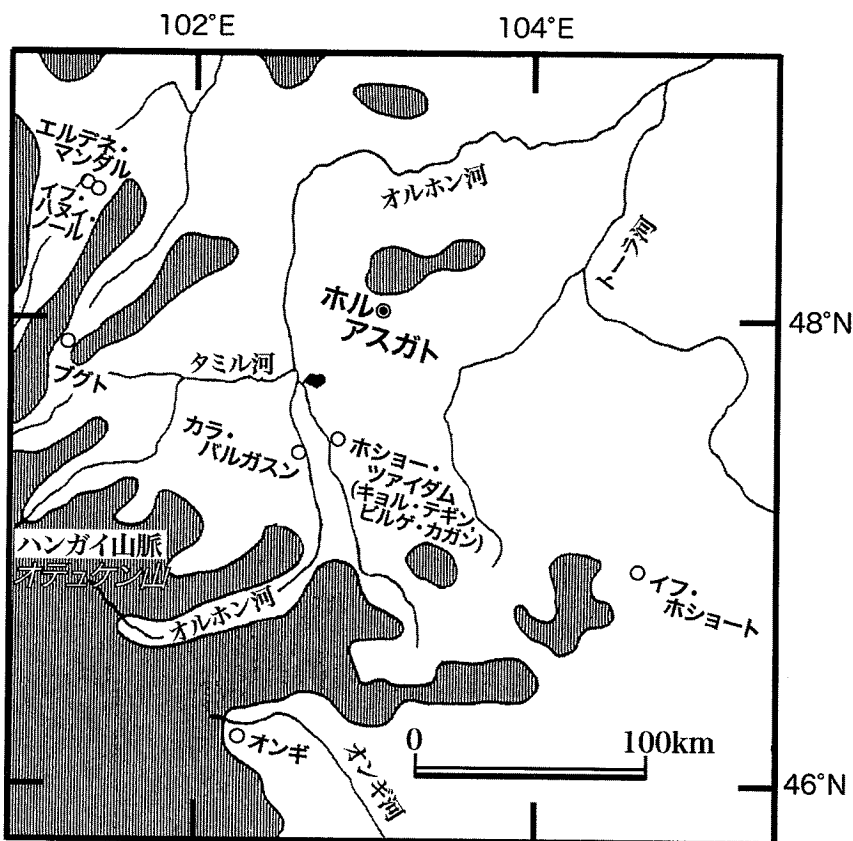
吉田 豊・森安孝夫

1999 「ブグト碑文」 森安・オチル 『モンゴル現存遺蹟・碑文調査研究報告』 豊中, 中央ユーラシア学研究会, pp. 122-125.



A：本稿に関連するモンゴリア遺跡地図

(破線の範囲を右ページの拡大図Bで示す)



B：本稿に関連するモンゴリア遺跡地図

(丸印は各遺跡・碑文の所在地を示す)

[付記] 本論文は文部省科学研究費補助金「内陸アジア諸言語資料の解読によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究」(基盤研究B・松田孝一代表) および「アルタイ諸地域での遺跡遺物の再利用を通してみた突厥遊牧民の祖先崇拜の文化史的研究」(基盤研究C・大澤孝代表) に基づく研究成果である。

Abstract:

**Revisiting Khöl-Asgat Inscription in Mongolia
from the Second Turkic Qaghanate**

Takashi ŌSAWA

Khöl-Asgat Inscription is found in the Khöl-Asgat region located some 32 km to the south-southeast of Mogod-soum in which it belongs to Bulgan province, and some 53 km to the northeast of Khöshöö-Tsaidam valley, where the so-called Orkhon Inscriptions are situated. It was first discovered by a botanist N. P. LEVIN in August 1891 and was surveyed by N. M. YADRINTSEV a few weeks later. The both were the members of the Russian Orkhon Expedition headed by W. W. RADLOFF.

Later this site has been surveyed by many archaeologists and historians, but curiously these later researchers have never produced rubbings of the inscription by themselves; they have simply referred to the old retouched rubbings published by RADLOFF in his *Atlas*. In the course of the Japan-Mongol joint research project 2006-2008 called “Bichees II”, we surveyed the site and produced rubbings of the epitaphs afresh. As a result we discovered six balbal stones, which have not been noticed as such by the previous expeditions. Moreover, we were able to find out so far unnoticed lines in Runic script on every side of the two slates bearing inscriptions. They have been deciphered by the present author together with those which had already been published before. Our fresh investigation of the sarcophaguses and the inscriptions indicates that the structure of the site is no different from those of Orkhon (i.e. Tonyuquq, Köl-Tigin, Bilgä-Qaghan, Ikh-Khöshööt, Ongi, etc.) from the Second Turkic Qaghanate.

My new readings have revealed a remarkable fact that a name *Ašīnas* is mentioned several times in the inscriptions. In view of the contexts it is to be

identified with the clan name of Kōk Türks referred to as *A-shi-na* 阿史那 **'â-si-nâ* in the Chinese sources and *"šyn's* in the Sogdian version of Bugut Inscription, the latter form having been discovered by Y. YOSHIDA and T. MORIYASU, who also mention its attestation in Karabalgasun Inscription. It is to be noted that as early as in 1903, É. CHAVANNES drew attention to the fact that the same clan name could be mentioned by TABARĪ in his history.

Consideration of the inscriptions leads one to suppose that the one in the centre of three figures represents Altun Tamyān Tarqan, who are mentioned several times in the epitaphs. He is said to be a younger brother of Kōl Tudun who belonged to the Ašīnas clan and the two figures surrounding him are most likely to be his sons who died as warriors together with their father. They are said to have departed from the earth in a *laqzīn* "pig" year, which seems to correspond to 723 CE. Since Apa Yegān Irkin who inscribed the epitaphs was only nine years old when they died, it is likely that it was only six years later in 729 CE when he arrived at manhood that he constructed the tombs and inscribed epitaphs for the deceased.

In the text one often encounters such expressions as *yayīz yerimkā adīrildīmīz* "we have departed from the brown earth", *bōkmādimīz* "we were not satisfied (when we died)", *āsizim* "I am sad", and *yīta* "alas!", which describe the feelings of the deceased in the first person. Phrases like them have been regarded as typical of the Yenisei funeral inscriptions, since they have not so far been attested in the Orkhon Inscriptions, which mainly record military achievements of the Qaghans. However, the occurrence of those expressions in our inscription seems to indicate that they had also originated from the Orkhon steppe, because the Khöl-Asgat Inscription was written by those people belonging to the ruling Ašīnas clan and the inscription is found only 53 km to the northeast of the Orkhon valley.